

土地利用と斜面畑からみた 水田稲作の多様性

雲南省者米谷のタイ、ハニ、アールー、ヤオ、クーツォン族の
生業戦略を事例として

Land Use and Diversity in Wet Rice Cultivation as Seen in Terraced Fields:
Livelihood Strategies of the Tai, Hani, A'lu, Yao and Kucong Tribes
in Zhemigu, Yunnan Province

西谷 大

NISHITANI Masaru

はじめに

①問題の所在と者米谷の多様性

②土地利用と斜面畑からみた生業戦略

③考察

まとめ—生業複合体と水田稲作の多様性—

【論文要旨】

調査地である中国雲南省紅河哈尼族彝族自治州に属する金平苗族瑶族傣族自治州者米拉枯族郷、老集寨郷では、8つの民族と1つの集団が混在して居住している。人々は海拔およそ500mの河谷平野からおよそ1,500mの山地の斜面にかけて異なった高度に居住し、地形と気候の複雑さは多様な生態的な環境を生み出し、そのことが各民族・村単位での生業戦略の差異につながってきた。

生業戦略の差異は水田稲作の多様性を生起させているのだが、その要因は生態的な環境と土地利用や山の斜面に広がる畑作地（斜面畑）、それに野生植物利用の方法や、さらには者米谷で6日ごとに開催される定期市とも深く関係している。

者米谷の生態的な環境は複雑であるが、者米谷の各民族・村はこの多様な生態的な環境を、それぞれが網羅的、均質的に利用しているのではなく、ある特定の生態的な環境を部分的に選択して利用している。そのため各民族・村の生業戦略に独自性と差異性が存在する。そして多様な生業戦略が集合し相互に補完しあうことで、生業複合体を形成している。

さらに者米谷の生業複合体は、市を介し生業戦略の差異化が促進されることで、より強固に進展してきた。このことが彼らを「水田稲作農耕民」という1つの概念だけでは把握しきれない、多様な水田稲作のあり方を創出している要因になっていると考えられる。

はじめに

調査地である中国雲南省紅河ハニ族彝族自治州（以下紅河州）に属する金平苗族瑶族傣族自治州（以下金平県）者米拉祜族郷、老集寨郷は、雲南省の南部に位置し、その郷境はヴェトナム国境に接する。この地域は、海拔およそ2,000～3,000mの山地が連なり平地は少ない。そして漢族の人口は少なく、漢族以外の8つの少数民族が混在して居住する地域である。人々は海拔およそ500mの河谷平野からおよそ1,500mの山地の斜面にかけて異なった高度に居住する。地形と気候の複雑さは多様な生態的な環境を生み出し、そのことが各民族・村単位での生業戦略の差異につながってきた。

筆者が著したこれまでの論功では、各民族・村の棚田について、その灌漑システムから水田稲作の多様性について論じてきた。しかし水田稲作の多様性を生起させている要因は、土地利用や山の斜面に広がる畑作地（以下、斜面畑）、それに野生植物利用、さらには者米谷で6日ごとに開催される定期市とも深く関係している。

本稿では者米谷の6つの民族・村をとりあげて、土地利用と斜面畑の利用について分析をおこない、それぞれの生業戦略を明らかにしつつ、生業システムから水田稲作の多様性を生起させている要因について考えてみたい。

①……………問題の所在と者米谷の多様性

1 問題の所在

本稿では土地利用と斜面畑をとりあげて、者米谷の環境利用と生業戦略の関係性について考えていくのだが、そこで問題なる点と方法について述べておきたい。

者米谷の生業の特質を抽出するため、これまで棚田に注目してきた。雲南省では、調査地である金平県に隣接する元陽県のハニ族の棚田が有名である。この地域の棚田は唐代から拓かれたといわれ、棚田の総面積は現在およそ12万haもあり、谷筋から海拔およそ2,000mの山の斜面に棚田を作る。その景観は壮観で「ハニ族の雲の梯子」の美称でも呼ばれている。ハニ族の棚田は1980年代以降、中国国内だけでなく国外からも注目されはじめる〔史2002〕。こうしたなかハニ族の棚田を中心とした生業は、生態環境を破壊することなしに「自然との共生」を実践してきた、独自の「棚田文化」だと主張されるようになる〔王1999、雷2002⁽²⁾など〕。

しかし雲南省において棚田による稲作は、ハニ族だけがおこなっているのではない。例えば今回とりあげる金平県の者米拉祜族郷、老集寨郷では8つの少数民族が、棚田による水田稲作をおこなっており、各民族や居住する生態的な環境の差異によって棚田の実態も多様性がある。ところが雲南省においてはこれまで棚田を指標として、地域や各民族を比較し生活世界の特質やシステムを論じる研究はほとんどおこなわれてこなかった。

こうした研究の流れのなかで、尹紹亭だけは雲南省において、民族を横断して30をも超える村

落を調査し、水田ではないが焼畑の全貌を明らかにしている [尹 2000a, b]。尹はそのなかで、各地域の焼畑を分布、耕作方法と技術、土地所有制度、移動といった項目に沿って詳細に分析している。そして生業の変化は社会経済および技術の変化と大きな相関があり、低技術・低生産の焼畑が、高技術・高生産の水田および常畑（プランテーションを含む）へ移行したというこれまでの認識に疑問をなげかけ、「焼畑＝少数民族＝原始的」「焼畑環境破壊説」という偏見に対して再検討を促している。つまり彼の研究方法は、まず詳細なフィールド調査を通じて、生態的な環境と生業との関係性を探り、焼畑を中心として生業の多様性の実態を明らかにした点が優れている。

筆者もこれまで者米谷という1つの地域ではあるが、まず灌漑システムに着目することで、各民族・村が生態的な環境の差異を生業戦略の差異に転化していることを論じた [西谷 2006a, 西谷 2007a]。さらに市と生業との関係性を探り、棚田のもつ多様性の実態を明らかにしてきた [西谷 2005a, 2005b, 2006b, 2006c, 2007b]。

つまり地域の生計維持システムを、構造としてとらえる試みをおこなってきたのだが、本稿では者米谷の生活世界のシステムを多面的にみるために、さらに土地利用と斜面畑（山の斜面の畑作地、かつての焼畑）の利用を手がかりして分析を試みたい。そして者米谷という地域の生業を総合的にみることから、水田稲作のもつ多様性について考えてみたい。

2 者米谷の多様性

調査地である金平県は雲南省の省都である昆明市からほぼ真南の東経 102° 31' ~ 103° 38', 北緯 22° 26' ~ 23° 04' の間に位置し、その南側の県境がヴェトナム国境と接している (図 1)。者米拉枯族郷、老集寨郷は、金平からさらに西におよそ 100km の地点にある。者米拉枯族郷、老集寨郷は、西北から南西に流れる者米川の河谷平野と、その南北に広がる山地から成りたっている (以下この河谷平野と南北の山地をあわせて者米谷と呼ぶ)。者米川の南が者米拉枯族郷であり、北側が老集寨郷である⁽⁵⁾。者米拉枯族郷の郷政府は下新寨におかれているが、この町は一般には者米 (以下この名称使用する) と呼ばれている。者米は漢語でジューミーと発音し、タイ語の漢字表記である。本来はタイ語で「豊かな土地」という意味をもつ。一方の老集寨郷は老集寨街に郷の政府機関が所在する。

南北 2 つの郷をあわせると、東西およそ 40km, 南北およそ 25km の広さがある。河谷沿いの平坦な土地は南北幅が 2 ~ 3km と狭く、海拔およそ 500m 前後である。それに対して河谷平野の南北両側は急峻な山地がせまるが、北と南でその地形が若干異なる。北側の老集寨郷では、1,200 ~ 1,800m の山が郷全体に散在し、尾根は者米川に向かって南北に走る。者米川の南では、ヴェトナムとの国境を区切る 2,000m 前後の脊梁山脈が西北から東南へ屏風のように連なる。海拔 3,074m の西隆山は、ヴェトナムとの国境にまたがる金平県の最高峰である。

4 月の下旬から熱帯モンスーンの影響を受け、温度が高くなり降水量も増す。例えば者米谷のほぼ中央の河谷平野に位置する頂青 (海拔およそ 480m) では、最も暑い 6 月の平均気温が 25.5 度で、1 月が最も寒く平均気温は 15.5 度になる。年間降水量は、およそ 2,000mm である。ところが同じ者米谷でも海拔 1,160m の地点にある古聡大寨では、6 月の平均気温が 22 度、1 月の平均気温が 12.4 度と河谷平野と平均気温に 3 度近くも差がある。

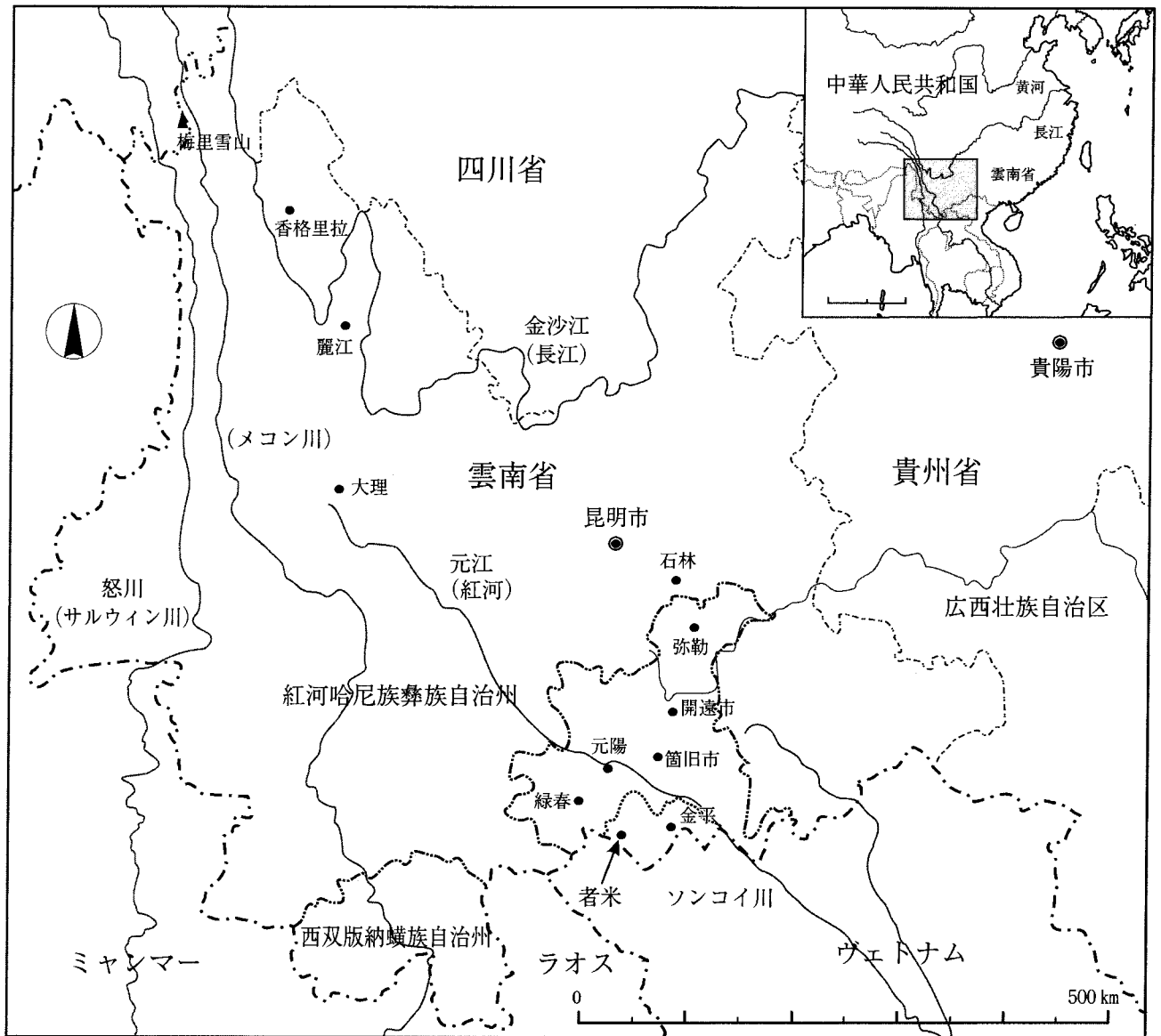


図1 調査地

現地では「十里不同天（10里離れば気候が異なる）」、「一山分四季，隔山又一天（1つの山でも季節は場所によって四季に分けることができ，一山越えればまた別の気候になる）」といわれるように，河谷平野と山地とでは気候の差が大きい。

2000年の統計によれば雲南省の少数民族の総人口は1415万3千人で，省総人口4235万9千人の33.48%を占める。少数民族の人口は，広西壮族自治区に次いで中国第2位である〔謝1999〕。現在，中国では56の民族が政府によって公定されているが（漢族を含む），そのうち雲南省内において人口が4,000人以上で，しかも一定の集住がみられる民族は26を数える。さらに雲南省だけに居住がみられる少数民族は15にのぼる。⁽⁶⁾ また雲南省は，ミャンマー，ラオス，ヴェトナムと国境を接しており，その距離はおよそ4,060kmにも達する。そのため20近い民族が，国境をまたいで分布している。

金平県は14の郷があり，ミャオ・ヤオ・タイ・ハニ・アールー・ジョワン・クーツォン・漢族，それに民族とは認められていない2つの集団である，ハーベイ人，マン人の10民族が居住する。⁽⁷⁾

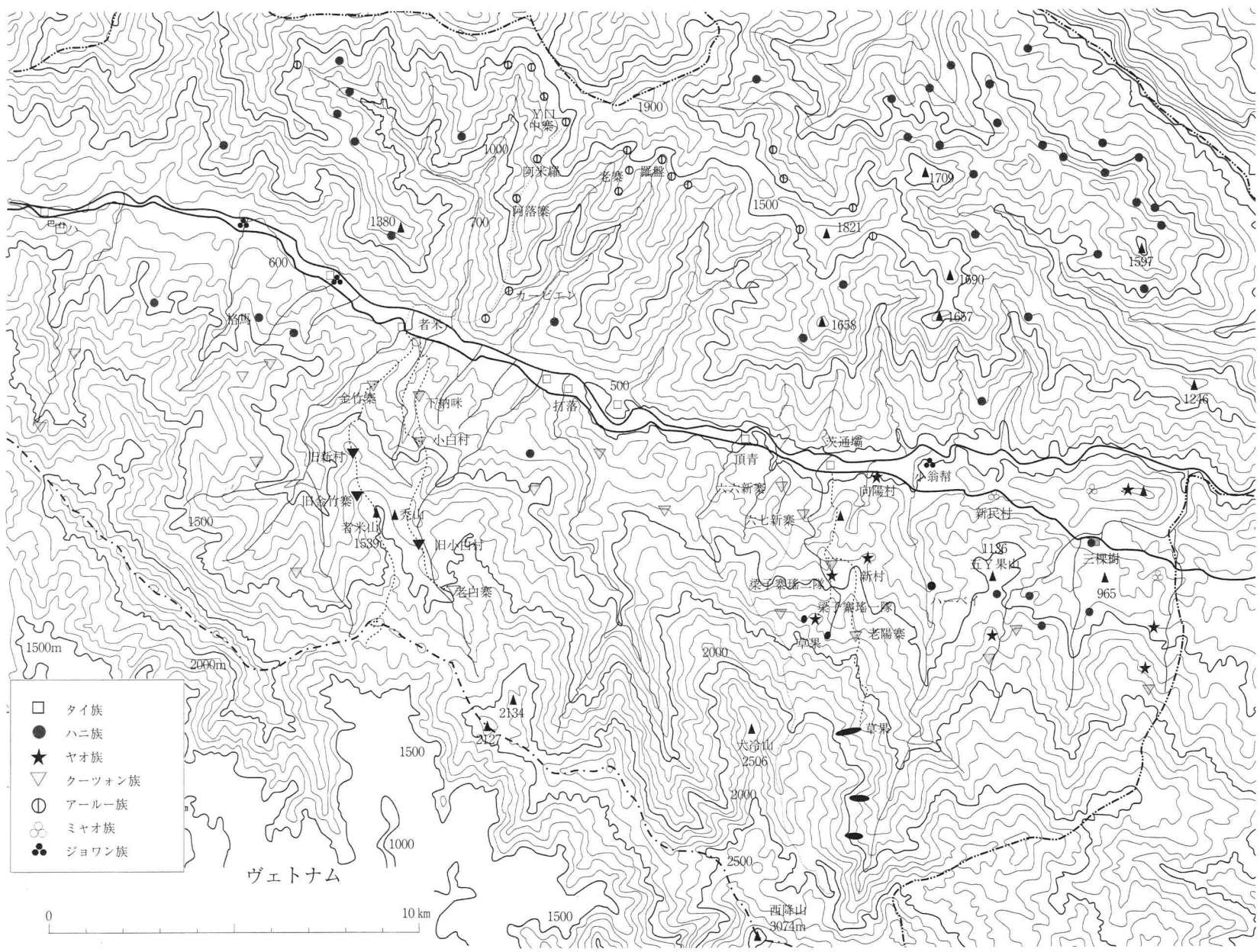


図2 者米谷の民族分布

2000年の第5次人口調査の統計によると、全県の人口は316,171人で、そのうち漢族を除く少数民族は86%を占める。

者米拉祜族郷は、この名称が示すようにラフ族の支族であるクーツォン族が多く居住する郷である。郷の人口は18,512人（2002年の統計）を数えるが、そのうち5,525人がクーツォン族であり、ほぼ人口の3分の1を占める。クーツォン族以外に、タイ・ジョワン・ハニ・ヤオ・ミャオ族、そしてハーベイ人が居住し、それぞれの民族によって居住に特徴がある（図2）。

者米谷の河谷平野に居住するのが、タイ族とジョワン族である。村の規模は600戸前後と大きい。者米谷で路線バスや一般の自動車の通行可能な主要幹線道路は、者米川南岸を走る公道だけである。タイ・ジョワン族の村は、こうした幹線道路沿いの、しかも山から流れる河川が者米川に合流する地点に作られている。

それより高い尾根上や山の斜面に、ハニ・ヤオ・クーツォン族が居住する。者米拉祜族郷内のハニ・ヤオ・クーツォン・ミャオ族を平面的な分布からみると、ハニ族の村は、郷の西部と東部に集中する。その間にはさまれるように、クーツォン族の村が分布する。郷内におけるヤオ族の村は6村と少ないが、いずれも郷の東部に村が集中する。

郷内のミャオ族が居住する村は3村と、8民族のなかで最も人口が少ない。郷の東端に位置する幹線道路に村がある。ハーベイ人の村は、郷の東を流れる、小翁幫川を2時間ほどさかのぼったところにある。ハーベイ人が居住する村は、1ヶ所である⁽⁸⁾。

者米川の北側が、老集寨郷である。この郷にはハニ族とアールー族が居住する。南の者米拉祜族郷と同様にハニ族は西部と東部に分布し、それにはさまれるようにしてアールー族の村が散在する。このように者米谷全体からみると、ハニ族が西部と東部に住むものの、その中間地域では、者米河をはさんで北側と南側とでは居住する民族に違いがみられる。

さて本稿で対象とする村は、上新寨（タイ族）、カービエン（アールー族）、高寨・牛籠（ハニ族）、梁子寨瑤二隊（ヤオ族）、そして老白寨（クーツォン族）の6村である。

タイ族は、「黒傣」、「白傣」、「普耳傣」、「曼仗傣」の4つの支族に分類されている。それぞれの支族は言語だけでなく風俗習慣も異なっている⁽⁹⁾。これらの4つの支族はおそらく金平県に居住しはじめた時期が異なると考えられる。白傣と黒傣が最も早く金平県に住みはじめ、伝承によると広西壮族自治区方面から移住してきたという。次いで普耳傣、曼仗傣がおよそ200年前に戦乱を逃れて西双版纳傣族自治州方面から移住してきたという〔和2006〕。者米谷では上新寨と頂青が黒傣族の村であり、その他はすべて白傣族の村である。

アールー族は、イ族の一支族である。イ族は雲南省内におよそ406万人居住するが、大きく「黒彝」系と「白彝」系の2つに分かれ、イ語系の言葉は、漢・チベット語族チベット・ビルマ語群に属する〔村松1987、謝1999〕。イ族の祖先は、かつて漢族から「夷人」「夷家」と総称されたが、これは漢代に雲南を「西南夷」と呼んで以来の伝統的名称である。黒イは四川省大凉山地区を中心として住み、武士族が主階級となり、奴隷を支配する奴隷制社会を形成してきたことで有名である。大凉山地区より南方の雲南省に住むイ族が白イと呼ばれている。イ族の自称は住んでいる地区や方言によって異なっており、金平県でも「アールー（阿魯）」以外に、「尼蘇」、「姆基」、「阿普」、「老烏」の4つの呼び方がある。

ハニ族は、雲南省内におよそ150万人居住する。ハニ語は、シナ・チベット語族チベット・ビルマ語群に属する。主に雲南省西南部の哀牢山脈にある新平、鎮源、墨江、元江、紅河、元陽、緑春、金平、江城などの県に住む。ハニ族の祖先は、漢代のころ雲南省の南部の瀘江流域に住んでいた叟人の和という部族だったといわれている〔村松1973〕。元代にモンゴル軍が雲南省を支配するとその支配下に入り、明・清代以後は土司に支配されていた⁽¹⁰⁾。ハニ族が多く暮らす元陽県では、みごとな棚田を切り開いていることで有名である。金平県にはいつ頃から居住しはじめたのか文献上からはよくわからない。しかし伝承によると、今から300～400年前に元陽、河口などから金平県に移住してきたという。県内では「糯美」「糯比」「多尼」「郭卓」「阿梭」「格河」の6つの呼び方がある。

ヤオ族は、雲南省内におよそ172万人居住し、漢・チベット語族ミャオ・ヤオ語群に属する。ヤオ族は、宋代に「山獠」という記載が文献上に登場することから、もっぱら山中で焼畑と狩猟採集を生業とする民族であったと考えられている。移動を繰り返すため民族全体としてのまとまりはあまりなく、小さな集団が広い地域に分散して居住しており、その状態は現在も続いている。ヤオ族の祖先は唐・宋代ごろ湖南から山伝いに焼畑をおこないながら南進し、明代には広西壮族自治区・広東省にまで進出した。雲南省にいつ頃やってきたか意見が分かれているが〔謝1999〕、少なくとも明代末から清代はじめには金平県に隣接する河口県にまで到達していた。

ラフ族（クーツォン族）は、雲南省内におよそ45万人が暮らすといわれている。チベット・ビルマ語系イ語系のラフ語を話す。羌族と同じ祖先をもち青海チベット高原から絶えず南へ移住するなかで形成された民族であり、者米谷には1930年代にヴェトナム方面から北上してきた。ラフ族（クーツォン族）は、自称として「拉祜納（黒拉祜）」「拉祜西（黄拉）」「拉祜普（白拉祜）」の3つがある。雲南省内では西双版纳傣族自治州のうちでも、ミャンマーよりに分布の中心がある。国境をはさんでミャンマーにおよそ15万人、タイ王国にもおよそ10万人が暮らしているといわれる。ラフ族（拉祜族）の「拉（ラ）」はトラを、「祜（フ）」は香りよく焼くという意味をもつ。つまりラフは「トラ食べる人」をさす。その名の通り狩猟を生業の中心とする山岳民族で、他の民族からはトラ狩りの民族とも呼ばれてきた。

このように者米谷は東西に長く狭い河谷平野と、その南北に広がる山地からなる複雑な地形を特徴としている。それにあわせて気候も多様である。さらに居住する民族も多様なだけでなく、各民族が居住し利用する生態的な環境にも、均質的ではなくそれぞれに差異が存在するという特徴もっている。

②……………土地利用と斜面畑からみた生業戦略

1 分類

各村の土地利用を比較するため、土地利用をまず水田、斜面畑、パラゴム林、竹林、植物群落に分類する。さらに斜面畑は栽培している作物によって、トウモロコシ、キャッサバ、レモングラス等に分ける。野菜が栽培されている斜面畑は、さまざまな種類が混植され、しかも短期間でその種類がかわるため「野菜畑」として分類した。植物群落は、以下の群落タイプⅠ～Ⅵの6タイプに分

⁽¹¹⁾
類した。

群落タイプⅠ：毎年火入れをしている立地に成立する植物群落。群落の構造はワラビなど茎の高い草本植物から成りたつ高茎草本群落であり、群落の高さは2m弱である。群落内で優占する植物はワラビ、ススキである。群落には、他にチガヤ、コシダ、ヨモギ属の1種、トウヒレン属の1種が出現した。この群落の出現植物は、明るく適潤な場所を好む。

群落タイプⅡ：火入れ後、2～3年以上経過していると考えられる立地に成立する植物群落。群落タイプⅠよりも、若干であるが森林への遷移段階が進行している群落。群落の構造はススキなどの茎の高い草本植物とキイチゴ属のような小低木、ハンノキ属のような陽あたりを好む樹木の稚樹が混ざっている。茎の高い草本と、低木の混ざった群落である。群落の高さは2～3mである。群落内で優占する植物はススキ、ヒマワリヒヨドリである。それ以外の出現種にはオグルマ属、ヨモギ属、ハンノキ属、キイチゴ属（2種あり）がある。

群落タイプⅢ：群落タイプⅡよりもさらに火入れを停止して年月が経過した植物群落である。森林への遷移段階はより進み、群落の構造も茎の高い草本の階層と、その草本の階層から突出する高さ4、5mの低木の階層に分かれている。しかし、低木の階層はその下にある草本の階層全体を覆うまでには至っていない（林冠は閉じていない）。このため、群落内には陽あたりを好む草本植物が出現する。群落の構造、出現する木本植物の幹周から、火入れ停止後10年弱経過した群落と推測される。優占する種は湿潤立地の場合と乾性立地の場合で異なるが、両方の立地を通じて木本植物の階層ではアミガサギリが、草本植物の階層ではヒマワリヒヨドリが優占する。

群落タイプⅣ：火入れを廃止して20年前後経過したと考えられる状態。群落構造の点では、林冠の成立した若齢林（林冠は閉じていない）。群落高（林冠の高さ）はおよそ7～15m。優占種はニッケイ属、ヒサカキ属、アオモジなどからなり、高木層にはアミガサギリも残存する。林内は明るく、林床には草本類がみられるが、林床の草本には陽地性の種も存在する。

群落タイプⅤ：火入れを廃止して数10年経過したと考えられる状態（100年以上の経過したものも含む）。林冠が発達した状態の二次林を広く含むため、その構造、種組成の面は大変多様な状態を含むタイプである。林冠は閉じた場合と完全に閉じていない場合がある。群落高はタイプⅣと同様7～15mほどであるが、状況によっては20m以上の高木が突出する。群落内の階層構造は低木層、亜高木層が未分化な場合や、亜高木層が未発達の場合があり、高木層、亜高木層、低木層、草本層の区別が明瞭ではない。高木層、亜高木層を構成する木本種の胸高直径は20～30cmのものが多く、胸高直径1mを越える木本種を含むタイプⅥの群落とは明瞭に異なる。草本層は強い日差しを嫌う陰地性の種によって占められる。優占種はクリガシ（シイノキ）属、アカガシ属、タブノキ属、ニッケイ属がみられる。

群落タイプⅥ：自然林、原生林の状態。林冠は閉じ、群落高は20mからそれ以上に達する。群落内の階層構造は高木層、亜高木層、低木層、草本層の区別が明瞭で、高木層、亜高木層を構成する木本種の胸高直径は1mを越えるものも混在する。林内は陽がささず、草本層は強い日差しを嫌う陰地性の種によって占められる。優占種はクリガシ（シイノキ）属、アカガシ属、タブノキ属、フカノキ属がみられる。ヴェトナム国境の分水嶺付近に存在することを確認できる。村の周辺には存在しない群落タイプである。

これから述べる分類した各土地利用の面積の算出方法は、地理参照されたクイックバード衛星データを、GISソフトウェアに読み込み、その上に地上踏査で得られた境界線をトレースすることでデジタルマップを作成した。そのマップに対してGISソフトの面積計算のアルゴリズムを適用することによって面積推定をおこなった⁽¹²⁾。

2 各村の斜面畑と土地利用

上新寨（タイ族）

村が利用している土地は南西から東北に流れる谷川沿いと、その周囲の谷筋の斜面に広がっている。この谷筋は、南北におよそ1,500m、東西の幅は500～1,000mを測り、北東から南西に細長い形状を呈している。谷筋の入口に上新寨が位置し、海拔およそ600mで、東側の谷をめぐる最も高い稜線上で、海拔およそ860mを測る。村が利用する面積は158.77haである。

土地利用と生業の変遷は、フィールド調査と聞き取り調査をあわせると1970年代以前、1980年代～2003年、2004年以降の3つの画期に分けることができる⁽¹³⁾。最初に調査を開始した2003年の土地利用の状況から述べる。上新寨の耕作地は谷筋の谷川周辺から、両側の斜面にかけて展開している（図3）。水田は、谷筋の入口から中央を流れる谷川の周辺沿いに分散しており（水田がバナナに転作される以前の水田面積は、33.7ha）（写真1）、村の土地の21.2%を占める（表1）。水田の周囲には、有用植物であるタケが移植され、竹林を形成している（面積23.24ha、村が利用する土地に占める割合は14.6%、表記方法は以下同じ）（写真3）。

棚田より高い斜面には、パラゴムの木を植えた斜面畑（パラゴム林）が展開する。パラゴム林は、谷筋の両斜面に広がるが、東側斜面のパラゴム林の面積が西側斜面よりも広い。パラゴム林は海拔およそ650～750mの間に展開する（41.68ha、26%）。パラゴムの木は生産請負制開始以降の1986年から植えはじめた換金作物である。若米谷では海拔およそ800m以下の土地で栽培され、海拔がそれ以上高くなると生育に適さない。パラゴムの木が栽培される以前の谷筋の斜面畑は焼畑の耕作地として利用され、主として綿、キャッサバを栽培していた。

斜面畑の上に広がっているのが植物群落タイプⅣの樹林である（写真2）。植物群落タイプⅣは谷筋の両側に広がるが、西側では水田とパラゴム林の上に広がり、稜線を超えて反対側の斜面にまで広がっている（47.20ha、30%）。さらに植物群落タイプⅣより上の東側の尾根には、クーツォン族の村である下納咪が利用している土地が、反対の西側の尾根上にはやはりクーツォン族の良竹下寨の土地が展開する。

このように村の土地利用は、谷筋の谷川周辺の低い地点から両側の斜面の垂直方向に、水田、斜面畑（パラゴム林）、植物群落タイプⅣの樹林という、およそのゾーニングが可能である。このゾーンとゾーンとの間に竹林や植物群落タイプⅡ（3.68ha、2.3%）・タイプⅢ（5.98ha、3.8%）がパッチ状に入りこむ。野菜畑は、村の周囲や水田の周囲に作られるが、面積はわずかである（1.15ha、0.7%）。また村内にはトウモロコシ、キャッサバ、レモングラスといった換金作物を栽培する斜面畑が存在しない。

表1 各村の土地利用

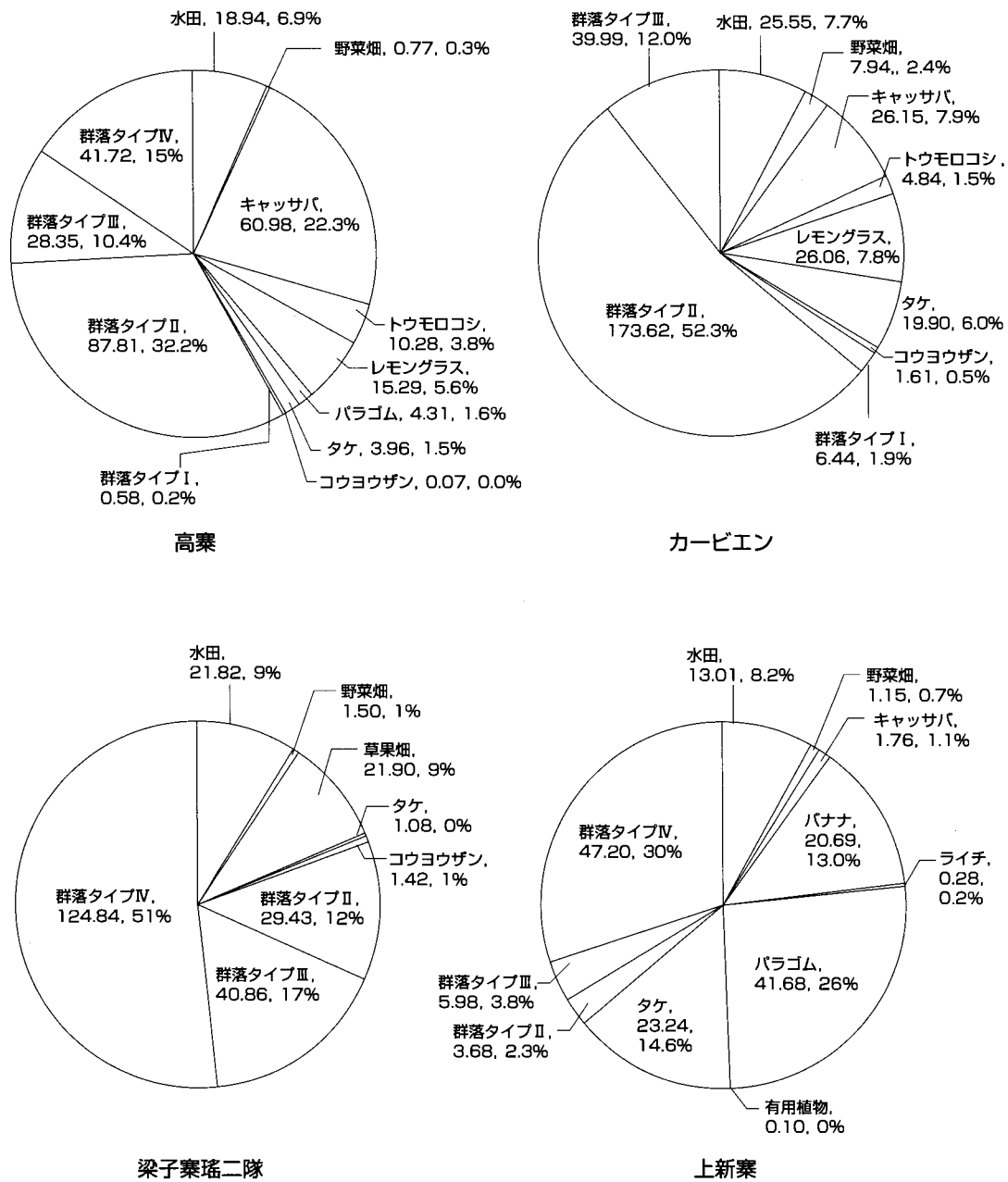


表2は、上新寨における一年間の栽培植物の作付けと収穫を暦にしたものである。その種類は非常に少なく、コメ、それに菜園畑でのトウガラシや青菜に限られる。

上新寨はコメの二期作が可能である。一般に一期目は2月にハイブリッドを植え7月に収穫する(太陽暦)。ハイブリッド米は1986年から導入した。二期目は8月に在来種である糯米を植え12月から1月にかけて収穫する。一期目のハイブリッド米は、そのほとんどを市場で売り現金化するが

二期目の糯米は自家消費米にする（2003年以前）。例えばR家（夫婦2人，子供2人）では，2003年の一期作目におよそ2,000kgの収穫があり（粳），これをすべて1kg = 1.6円で販売した。二期作目はおよそ1,000kgあり自家用に回した。R家では600本のパラゴムの木を所有しており，そのうちおよそ200本の木からタッピングが可能である。年間でおよそ8,000元の収入になり，コメの収入と並んで重要な現金獲得の手段になっている。

最初に述べたように，生業の変化は1970年代以前，1980年代～2003年，2004年以降の3つの画期に分けることができるのだが，1970年代以前の生業は水田で二期作をおこない，斜面畑で綿やキャッサバを栽培していた。余剰米や，綿から作った綿布，それにキャッサバ等はいずれも市での交易さいの交換商品にするか仲買に売っていた。1980年代からはじまる生業変化の特徴は，生産請負制の開始に伴う換金作物栽培の普及だといえる。特に1986年に，斜面畑にパラゴムの木を導入し，これが主要な換金作物になり，綿花，キャッサバなどの作付面積が徐々に減少していく。2004年からはじまる変化の特徴は，棚田でのバナナ栽培がはじまったことである。バナナもやはりパラゴムと同様に，海拔およそ800m以下が生育に適している。バナナの栽培業者が雲南省内からだけでなく，四川省や広東省から者米谷にやってきて，村人から土地を1ムー = 1,200元（3年ごとの契約）で借り上げ，バナナの作付けをはじめた。また村人は業者に一日 = 約20円で日雇いされ，バナナの植え付けから収穫までの管理を委託されている。2006年には村内の一部残っていた水田も，すべてバナナ畑に転作するという，急激な変化がおこっている。

表2 各民族の農事暦

●植える ○収穫

上新寨	農暦	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
現在，水田 (70年代以前)	イネ(一期目，ハイブリッド米)	●					○							
	イネ(二期目糯米)							●					○	
	早稲田(粳米)	●					○							
	中稲(糯米)				●					○				
	晩稲(糯米)								●				○	
斜面畑	綿				●					○				
菜園	トウガラシ			●		○	○							
	青菜								●	○				

カービエン	農暦	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
棚田(2期)	イネ(一期目，ハイブリッド米)	●				○	○							
	イネ(二期目，在来種，糯米，粳米)							●	●				○	○
	ダイズ			●				○	●	●	○	○	○	
斜面畑	トウモロコシ			●				○	○					
	キャッサバ		●	●							○	○		
	レモングラス													
	落花生		●					○	●	●		○	○	
	サツマイモ						●			○				
	芋頭(ミズイモ，サトイモ)				●						○	○		
	洋糸瓜		●	○	○	○								

斜面畑	洋糸瓜							●	●	○	○	○	○			
	黄瓜				●			○	○	○						
	苦瓜				●			○	○							
	青菜									●	○	○	○			
	ニラ		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	カボチャ				●					○						
	ダイコン									●			○			
	パイナップル									○						
	パパイヤの花								○	○	○					
	四季豆(インゲン)								●		○	○				
	ササゲ								●					○		
	ナス								●					○		
	サンショウ								●		○					
	サトイモ					●								○		
	コンニャク					●								○		
	ネギ	○	○	○	○	○	○	●	○	○	○	○	○	○	○	○
	菜の花		○	○	○											
タケノコ										○	○					

梁子寨瑶		農暦	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
棚田(1期) 水田周囲	イネ(在来種)						●					○			
	イネ(ハイブリッド米)	●						○							
	落花生		●						○						
森林	草果				●	●	●	●		7~8年後	○	○			
	藍					●				○2年目	○2年目				
焼畑 (90年代末まで)	トウモロコシ		●	●						○1月植	○2月植				
	キャッサバ		●	●						○	○				
	地谷		●	●						○					
	黄豆			●						○					
	タバコ・ケシ			●	●							○	○		
菜園	青菜・白菜									●	●		○	○	
	ヘチマ		●	○	○	○									
	インゲン							●		○	○				
	ササゲ								●				○		
	キュウリ				●			○	○	○					
	落花生		●						○						

高寨		農暦	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
斜面畑	トウモロコシ				●					○	○				
	キャッサバ			●	●							○	○		
	レモングラス														

老白寨		農暦	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
焼畑	トウモロコシ					●							○		
	キャッサバ					●	次年の3月に収穫								
	陸稲					●							○		
棚田	イネ(在来種)							●				○			

カービエン（アールー族）

カービエンが利用する土地は、村の背後の海拔およそ1,350mの山から、尾根の先端までの南北およそ3kmと、その東西の斜面の幅およそ2kmの範囲である。尾根の先端で者米河に面した斜面は下新寨が利用している。村が利用する面積は332.1haである（図4、表1）。東西の斜面は、小さな谷筋と尾根筋がヒダのように連続している。小さな谷筋の谷底周辺は急斜面で、斜面畑に適さないため植物群落タイプⅢが広がる（39.99ha, 12.0%）（写真4）。村の棚田は尾根筋上から斜面にかけて広がるが（25.55ha, 7.7%）（写真5）、水田間の斜面にはキャッサバ（26.15ha, 7.7%）（写真6）、レモングラス（26.06ha, 7.8%）、トウモロコシ（4.84ha, 1.5%）そして野菜を栽培する斜面畑（7.94ha, 2.4%）と植物群落タイプⅠ（6.44ha, 1.9%）とタイプⅡ（173.62ha, 52.3%）、それにタケ林（19.9ha, 6.0%）が広がる。

植物群落タイプⅡはタイプⅢに移行する直前に焼かれて斜面畑に切りかえられる。山焼きは日中の最高気温が26～28度まで上がり、反対に湿度が30%前後にまで下がる2～4月の乾季におこなわれる。その後雨季に入った5月に作物の植え付けがはじまる。

山の斜面は斜面畑と植物群落タイプⅠ・Ⅱに小さく区切られているが、数年おきに換金作物を植える斜面畑から植物群落タイプⅠ・Ⅱへの転用を繰り返しており、耕作地内を焼畑と同じ原理で放棄と栽培を繰り返す。つまり斜面畑の間に広がる植物群落タイプⅠとタイプⅡは休耕地の役割をはたしている。斜面畑にはキャッサバ、レモングラス、トウモロコシが植えられるが、それとは別に野菜畑が点在する。

村の北側に位置する山の周辺は植物群落タイプⅡとタイプⅢが広がるが、毎年、この一部分を焼いて斜面畑が作られ、主としてトウモロコシを栽培する。

海拔およそ800m以下の低い棚田では、二期作も可能である。その場合は一期目にハイブリッド米を植え二期目に在来種か、または糯米を植える（表2）。海拔およそ800m以上の水田は、一期目で在来種を植える。カービエンでは、ハイブリッド米は1990年代の終わりに導入された。収穫量は多くなったが、作付面積が狭いため現在でもコメを自給している家は少なく、1年の後半になるとコメが不足し者米の市でコメを購入している。

斜面畑で栽培している作物では、トウモロコシ、キャッサバ、レモングラスの作付面積は広い。しかしそのほかに1年を通じて、落花生、サツマイモ、ミズイモ、サトイモ、洋ヘチマ、キュウリ、ニガウリ、青菜、ニラ、カボチャ、ダイコン、パイナップル、パパイヤ、インゲン、ササゲ、ナス、サンショウ、サトイモ、コンニャク、ネギ、ナノハナ等、実に多様な種類の青果類が栽培される（表2）。

トウモロコシとキャッサバは1970年代以前から斜面畑で栽培され、コメと共に重要な食料だった。現在は者米の仲買業者に売る換金作物である。カービエンのY家を例にとると、この家の近年の収入は、キャッサバの年間の収穫量が2,000～3,000kgでこれを1kg = 5～6毛で売る。トウモロコシもやはり2,000～3,000kgの収穫があり1kg = 1.1円で売る。

レモングラスは1990年の半ばに、新たな換金作物として導入された。レモングラスは1年に3～4回収穫して蒸して油を抽出しこれを者米の町で仲買業者に売る。Y家のレモングラスの収穫は毎年100～200kgあり、1kg = 30円で売っているという。

野菜はいずれも者米の町で6日ごとにたつ市で女性が主として売りにいく。カービエンでは各家

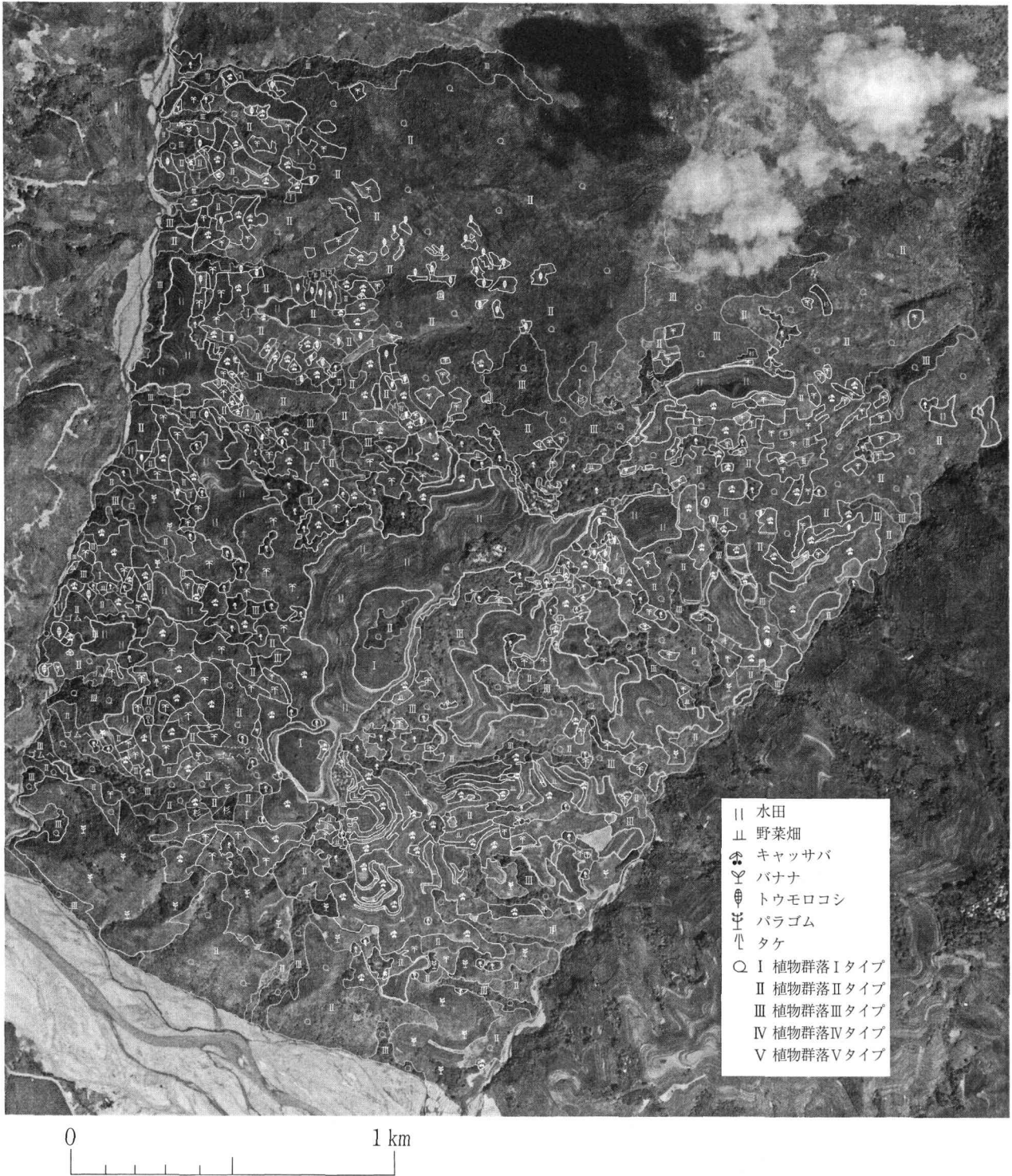


図4 カービエンの土地利用

が、野菜の栽培と6日ごとの定期市での販売をおこなっている。1回の野菜販売でおよそ40～50元の収入になる。1ヶ月で200～250元、1年にするとおよそ2,000～3,000元の収入になり、これが各家の重要な現金収入になっている。

カービエンの土地利用の特徴は、植物群落タイプがⅠ～Ⅲまでしかなく、樹林を形成するタイプⅣ以降の植物群落が存在しないことである。植物群落タイプⅢも谷底の急斜面にしか残存していない。また植物群落タイプⅠ～Ⅱは斜面畑の休耕地として利用されており、いわば耕地の一部を形成している。つまり村内の土地は水田か斜面畑にほぼ利用し尽くされている。

者米谷においてアール一族の棚田は最も壮大で、しかも精緻な灌漑システムをもつ〔西谷2006a, 2007b, 2007c〕。ところが水田面積は、村が利用する土地に占める割合は7.7%と狭いのに対して、斜面畑と野菜畑の合計は19.6%と広い。さらに斜面畑の休耕地の役割をはたしている、植物群落タイプⅠ・Ⅱ・Ⅲが66.2%を占め、その面積の広さが特徴である。

このようにカービエンの生業の中心は、1970年代以前から現在まで水田稲作ではなく斜面畑による畑作だといえる。

梁子寨瑶二隊（ヤオ族）

梁子寨瑶二隊が利用する土地は、村の周囲と、大冷山（海拔2,506m）と西隆山（海拔3,074m）の東側斜面の森林地帯（植物群落タイプⅣ・Ⅴ・Ⅵ）に分けることができる。現在、森林地帯は政府が保護林に指定している（図5）。

村の周囲で利用している土地は、242.84haある（表1）。村の周囲にはいくつもの尾根筋が複雑に入りこんでいるが、棚田は尾根上から斜面にかけて作られる（21.82ha, 9.0%）。尾根の斜面は植物群落タイプⅡ（21.8ha, 2.9%）、植物群落タイプⅢ（29.43ha, 12.1%）、植物群落タイプⅣ（124.84ha, 51.4%）に分類できる。村に隣接して野菜畑があるが（1.5ha, 0.7%）、その面積は狭い。このように村の周囲は斜面畑がほとんどなく、樹林を形成する植物群落タイプⅣの面積が半分近く占めることが特徴である。

梁子寨瑶二隊における1年間の栽培植物の作付けカレンダーをみると（表2）、コメは一期作で、在来種とハイブリッド米が植えられる。各家でコメはほぼ自給が可能であるが、余剰米を市で販売する余裕はない。野菜畑で植えられる種類は、青菜、ハクサイ、ヘチマ、インゲン、ササゲ、キュウリ、落花生など種類は限られ、すべて自家用である。生産量は限られており、不足分の野菜は定期的に定期市で購入している。

1998年まで村の周辺で、焼畑がおこなわれていた。集落の周囲に広がる植物群落タイプⅡ・Ⅲは焼畑をおこなっていた場所である。焼畑の方法は、3～4年ごとに場所をかえる切りかえし畑で、2月に木を切りしばらく放置し、周囲に火道を設けて下から火をつけて焼く。焼畑では陸稲、トウモロコシを主として栽培していたが、それに加えてキャッサバ、キマメ、タバコ、野菜も植えていた。焼畑での栽培が終わるとその場所は10年以上放棄し、植生の回復を待ってから再度焼畑にしていた。さらに1920～30年代にはケシも栽培していた。1989年まで焼畑で陸稲を植えていたが、この年にハイブリッド米を海拔およそ800m付近の棚田で栽培するようになる。

村の周囲の森林では、2005年まで藍（リュウキュウアイかその仲間）を栽培していた（写真7）。

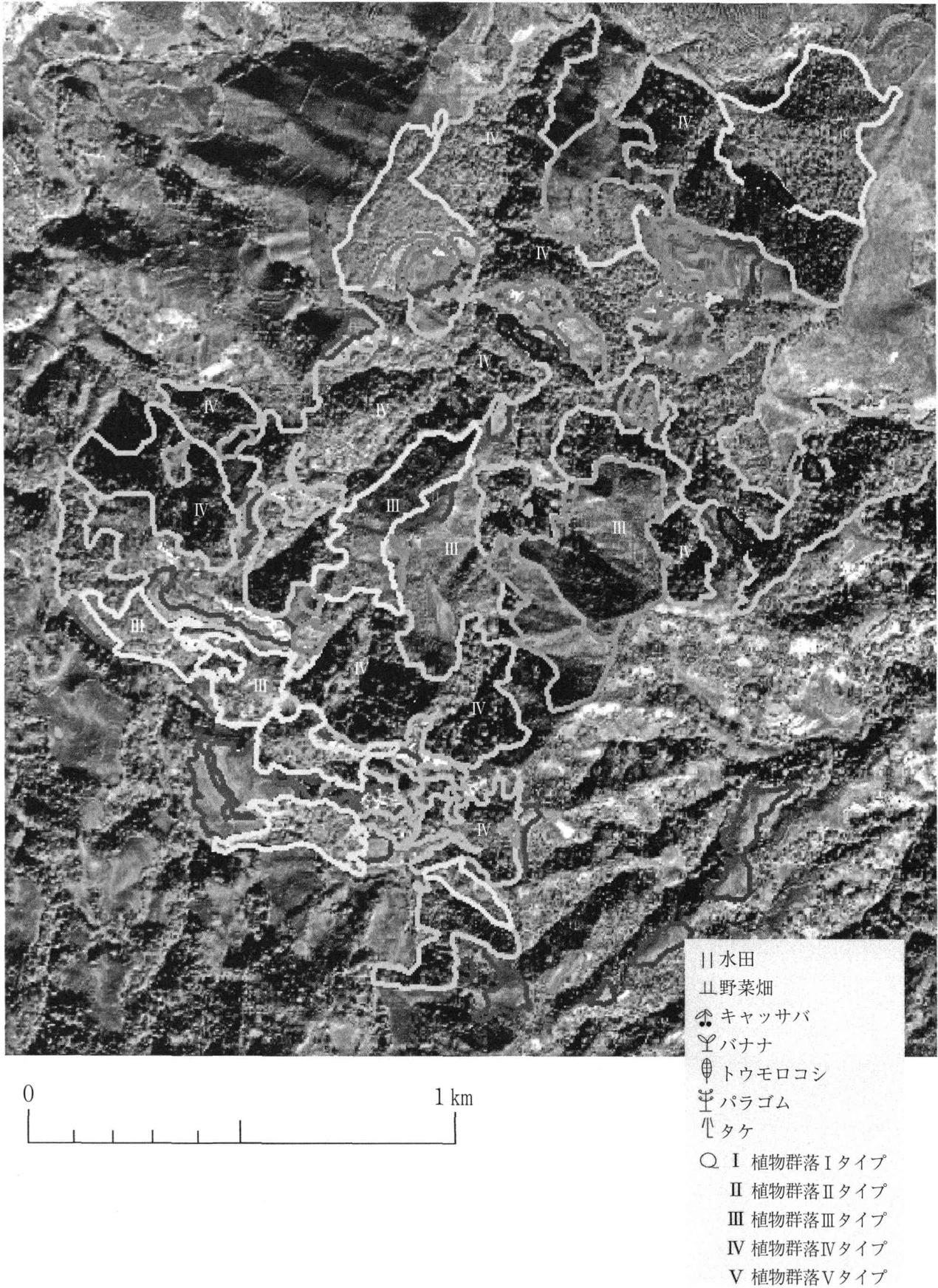


図5 梁子寨瑶二隊の土地利用図

者米谷のヤオ族は綿布を織る習慣がなく、すべてタイ族から購入する。者米谷において1950年代以降からハニ族も藍を栽培するようになるが、それ以前はヤオ族しか藍を栽培しておらず、これを他の民族に売ることによって彼らの主な現金収入になってきた。⁽¹⁴⁾ さらに森林での野生動物狩猟も1990年代終わりまで、盛んにおこなっていた。⁽¹⁵⁾

さて村人が利用するもう1つの地域は、大冷山と西隆山の東側斜面に広がる森林地帯（植物群落タイプV・VI）で、村からおおよそ南に10km離れたヴェトナム国境まで続く（写真8）。現在は保護林に指定されているが、1990年代の終わりまで、野生動物の狩猟、有用植物採集、森林内での換金作物栽培などで、広い面積を利用してきた。現在も森林内で草果（ショウガ科 *Zingiberaceae* のビャクヅク属植物 *Amomun tsao-ko* CREVOST et LEM. の成熟果実。乾燥させたものが中華料理の香辛料になる）を栽培し、これを市に出荷して現金収入にしている。そのため、彼らが実際に利用している土地は、村の周囲の面積よりもはるかに広い。⁽¹⁶⁾

梁子寨瑤二隊の各家の草果畑は、大冷山・西隆山の1,500～2,000mの東斜面で、谷筋を流れる溪流沿い周辺に作られる。村から最も近い草果畑でおおよそ4kmあり、最も遠い草果畑は村からおおよそ10km離れ、西隆山の東側でヴェトナム国境地帯の原生林（植物群落タイプV）内にある。村から歩くとおおよそ9時間を要する。⁽¹⁷⁾ 草果畑が展開する植物群落タイプV・VIの森林は、いずれも政府が保護林に指定している。そのため1ムーあたり10元の使用料を政府に支払って草果畑にする。

鄧家の草果畑は村から最も遠いヴェトナム国境沿いの谷筋にある（写真9）⁽¹⁸⁾（おおよそ5ha）。溪流沿いは植物群落タイプIVが広がり、山の稜線沿いは植物群落VIタイプになる。草果畑は、溪流沿いから山の斜面の海拔おおよそ1,700～2,000mに広がる（草果の栽培、収穫については註参照）。（写真10、写真11、写真12）⁽¹⁹⁾

梁子寨瑤では1958年から草果の栽培をはじめ⁽²⁰⁾。当時の価格は1kg = 7～8毛と安く、70～80年代になっても1kg = 7～8元だった。ところが1999年は冷夏の影響で、者米谷以外の草果の収穫が激減し、価格が1kg = 90元にはね上がった。それ以降、村人全員が草果栽培をおこなうようになる。

鄧家の草果畑の収穫は、毎年平均すると2,000～3,000kgあり、4万元前後の収入が得られる。梁子寨瑤二隊で最も草果による収入が低い家でも、おおよそ2,000元あるという。しかし草果は毎年の天候による収穫量の変動が大きい。草果の花が咲く5～6月に雨が多いと収穫量があがるという。また草果の価格は者米谷で決定されるのではなく、雲南省各地の草果の出来高によって大きく変化する。2003年は1kg = 32元。2004年は1kg = 24元、2005年は1kg = 20元、2006年は1kg = 30元である。1999年の価格と比較すると近年は安値が続いている。梁子寨瑤二隊における現在の現金収入は、草果の収入に頼っているのだが、その収穫量と価格は天候と外部の市場価格によって大きく変動するため、投機的な換金作物だといえる。

梁子寨瑤二隊の生業の特徴は、村周辺は植物群落タイプIVの樹林の面積が広く、大冷山と西隆山の周辺には、植物群落タイプV・VIの原生林が残る。彼らは1990年代まで焼畑、水田、狩猟採集といった生業を複合的にこなっていた。しかしヤオ族が者米谷に移り住んだ1920年代以降の最も主要な現金収入は、森林での藍の栽培だった。現在は森林での換金作物は藍から草果へと変化した。森林利用に卓越した生業を主体としてきたという点では一貫している。

高寨（ハニ族）

高寨が利用する土地は、者米河より北側で、山頂から東西に延びる尾根を下り者米河に至る稜線から南側と、反対に山頂から西の谷筋を下り者米河に至るラインの東側である。面積は、273.07haを測る（図6）。

村の背後にある高寨山（海拔1,380m）の山頂を中心に東西およそ800m、南北およそ400mの範囲に植物群落タイプⅣが広がり村の水源涵養林になっている（写真13）。また東の谷筋と西の谷筋にも、植物群落Ⅳタイプが残る（両者あわせて41.72ha、15.0%）（表1）。

棚田は上部、中部、下部の3つ地区に分けることができる（18.94ha、6.9%）（写真14）。棚田地区を除いた尾根の斜面は、斜面畑と植物群落タイプⅠ・Ⅱ（87.81ha、32.2%）・Ⅲ（28.35ha、10.4%）がパッチワーク状に広がっている（写真15）。

植物群落タイプⅡがタイプⅢに遷移した段階で、2～3月の乾季にその一部分の草木を刈り取って、山焼きをおこない耕作地に切りかえる。つまり斜面畑の間に広がる植物群落ⅠとⅡは休耕地の役目をはたしており、焼畑と同じ原理で放棄と栽培を繰り返す。

この方法はカービエンと同じなのだが、カービエンの場合は植物群落タイプⅠがタイプⅡに遷移した段階で焼いて耕作地に切りかえるのに対して、高寨では植物群落タイプⅢを焼いて耕作地に転換するという違いがある。また高寨の斜面畑や耕作地内に分布する植物群落タイプⅡ・Ⅲに分類できる、それぞれの区画面積はカービエンよりもはるかに広い。

竹林（3.96ha、1.5%）は、斜面畑と植物群落Ⅱ・Ⅲの間に点在し、これが建物や柵などの建築材、それに籠などの道具の材料として利用しているだけでなく、日々の燃料にもなっている。

棚田地区はすでに述べたように、高さによって上部、中部、下部に分かれる。1990年代の半ばからハイブリッド米を植えはじめてから、コメの自給が可能になったという。それ以前は、1年の後半になるとコメが不足して者米で購入していた。

斜面畑で栽培する主要な作物はキャッサバ（60.98ha、22.3%）、トウモロコシ（10.28ha、3.8%）、レモングラス（15.29ha、5.6%）で、野菜畑（0.77ha、0.3%）は村の周囲や下部の棚田地区周辺に点在する程度である。特に東の尾根の者米河に面した斜面は、キャッサバが集中して栽培されている。

このように高寨の土地利用の特徴は、高寨山周辺の植物群落Ⅳタイプ、その周辺の植物群落Ⅱ・Ⅲタイプ、その下の斜面畑と棚田地区とゾーニングが可能なことである。また土地利用のうち、斜面畑が最も広い面積を占め、カービエンと異なり野菜畑がほとんどなく、そのかわりにキャッサバの作付面積が広いことを特徴とする。

牛籠（ハニ族）

村の面積はおよそ220ha⁽²¹⁾ある。集落（海拔およそ800m）の背後から山の斜面（海拔およそ1,000mの地点）までは植物群落タイプⅢ・Ⅳが広がり水源涵養林になっている（図7、写真16）。

村の棚田は者米河に沿った緩斜面、村の北側の尾根筋上、そして尾根の西と東を南北に走る谷筋の溪流沿い、この3つの地区に広がっている。また村や水田の周囲には竹林が点在する。村が位置する舌状に延びた尾根筋の東西斜面、そして谷筋をはさんで向かい合う斜面が斜面畑になっており、



図6 高寨の土地利用

いずれも海拔およそ800m以下に展開している。

水田はすべて海拔およそ800m以下にあり、二期作が可能である。またハイブリッド米が1990年代に導入される以前から、コメの自給が可能であり、上新寨と同様に一期目で収穫したコメは市で売り、二期目を自給用にまわしていたという。

斜面畑は、細かく分かれキャッサバとレモングラスが植えられる。しかし高寨やカービエンで特徴的だった、植物群落タイプⅠ・Ⅱ・Ⅲが耕作地の間にパッチ状に入りこむことはない。またトウモロコシは1980年代以前には栽培していたが、現在は全く作付けしていない。2005年からキャッサバを栽培していた斜面畑で、パラゴムの幼樹の植え付けがはじまり、転作が進んでいる。また2004年からは者米河に沿った水田をバナナ畑へと転作をはじめ、2007年には村のすべての水田がバナナ畑へと変化した。

牛籠では現在も盛んに綿を紡いで糸を作り木綿布をおって藍で染め、市でタイ族以外のアルー、ヤオ、ミャオ族などに売って現金収入にしている（写真17、写真18）。綿はベトナムからの安価な輸入品を使っているが、1990年代以前は村の斜面畑で栽培するかタイ族から購入し、それから糸を紡ぎ綿布を織っていた。

牛籠における2003年以前の生業の特徴は、棚田が海拔およそ800m以下にあることで、二期作とコメの自給が可能だったことにある。そして1970年代以前の斜面畑では、トウモロコシ・キャッサバ・綿が主要な作物として栽培していたが、1990年代半ばからレモングラスが栽培されるようになる。2004年からは水田をバナナ畑へ転作し、さらに2005年からはキャッサバ畑のゴム林への転作が進んでいる。3つの画期（1970年代以前、1980年代～2003年、2004年以降）によって牛籠の生業は変化しているが、耕作地が海拔およそ800m以下という特徴をいかした生業戦略を編み出していることでは共通している。

老白寨（クーツオン族）

村が利用している土地は、南北およそ6km、東西およそ3kmの範囲で、面積はおよそ1000ha⁽²²⁾を測る。山が周囲を取り囲む南北に長い谷状の地形で、村から南におよそ3kmには東西に延びる脊梁山地がよこたわり、その尾根上に植物群落タイプⅢ・Ⅳが広がる。老白寨から東側の山の斜面にかけても植物群落タイプⅢが残る（写真19）。しかし南北に長い谷の中央を流れる溪流沿いから周囲の山の斜面にかけての土地は、すべて山焼きをおこない植物群落タイプⅡの特徴である、木がほとんど生えていない草地状の景観が広がる。わずかに谷筋沿いに植物群落タイプⅢが残存しているにすぎない（図8、写真20、写真21、写真22）。

毎年2～3月の乾季に、草を刈り取り防火帯を設けるといった作業を一切せずに、植物群落タイプⅢを低い地点から火をつけ焼き上げていく。彼らは1930年代に国境を越えてベトナムから北上し、現在の場所よりも低い小白村の上に村を作った。そして1950年代のはじめに現在の村に移り住んだのだが、1950年代の終わりには谷全体の木がほとんどなくなり草地状態になったという。

1998年まで焼畑が中心で、水田そのものが存在していなかった。焼畑では陸稲、キャッサバ、トウモロコシを植え、陸稲は溪流の近くに、山の斜面の高い場所ではトウモロコシを栽培していた。いずれも3年連作し、4年目に耕作地を切りかえる方法をとっていた。



図8 老白寨の土地利用

1999年から政府によって山焼きが禁止され、それを機会に棚田を作るようになる(写真23)。現在も山焼きをおこなっているが、火入れをした山の斜面は畑として利用していない。わずかに集落周辺にごく小規模の菜園畑があり、冬期だと青菜とハクサイを栽培する程度である。村人によると山を焼く理由は、水牛を放牧するためだという。

1950年代以前は、動物狩猟を盛んにおこない、狩猟したイノシシ、キョン、鳥類、ネズミ、カエルなどを者米の市で売りコメと交換していた。またキノコ、キクラゲ、干魚といった産物も交換商品であった。市での販売だけでなく、ハニ、ヤオ、タイ族と直接の取引もおこなっていた。その場合は古着、中古の鉄製品(オノ、クワ、スキなど)、コメ、塩と交換していた。

現在でもイヌと籐で編んだ籠は重要な商品である。クーツォン族はイヌを食べないが、タイ族は好んで食べる(写真24)。子犬だとおよそ20元、成犬だとおよそ200元で売れる。籐で編んだ籠は市では現金で売りますが、ヤオ族など他の民族と交換する場合は現在でも、籠に入る籐の量で売ります。

別の現金収入の方法はヴェトナムから商品を選び、それを市で販売するという仲介交易であり現在も続いている。村から歩いて国境を超えて5時間くらいの場所に親戚の村があり、そこでキノコ、キクラゲ、黄魚などを購入し、それを者米の市で売り現金収入にしている。⁽²³⁾ヴェトナムの親戚は現在も焼畑をやっており、陸稲、トウモロコシ、キャッサバを主として植えているという。

老白寨の最大の現金収入は、草果の栽培である。栽培地は、村から南東方向に位置するヴェトナムとの国境沿いに広がる植物群落タイプⅣの森林内で、およそ10年前からはじめた。老白寨の各家すべてが草果栽培をおこなっており、2005年の草果収入は、最も多い家で2万元、少ない家でも4~5,000元の収入があった。

まとめると老白寨の生業は、1990年代以前まで焼畑中心であった。その方法は村の周囲の森林は残しつつ、彼らを使用している谷全体を一度ほぼ全面に焼き尽くし、そのなかの一部を毎年焼いて畑にし、陸稲、トウモロコシ、キャッサバなどを栽培していた。しかし焼畑での収穫は常に不安定で、野生動物を狩猟して者米の市で売るか、ハニ、ヤオ、タイ族とコメ、服、鉄製品との交換をおこなっていた。1990年代以降は、焼畑と動物狩猟はほとんどおこなわず、草果栽培と、ヴェトナムで商品を仕入れて市で売る交易が中心になっている。

3 野生植物利用

野生植物利用の実態を上新寨(タイ族)、梁子寨瑤二隊(ヤオ族)、カービエン(アール族)の3つの民族・村で比較した(表3)。

野生植物の生えている場所を、1水田、2畦畔、3畦畔・路傍、4水路・沢、5草地・路傍、6草地、7林縁、8森林の8つに分けた。そこで採集した植物を村に持ち帰り、村人に同定してもらいつつ、その利用方法について聞き取り調査をおこなうという方法をとった。さらに村人と一緒に村の周辺を踏査し、野生植物の同定と利用方法を聞き取るという方法もあわせて実施した。⁽²⁴⁾

上新寨では22種類の野生植物を採集したが、このうち食用として利用しているのは6種類、薬として使うのは6種類、ブタ・ウシのエサにするのが4種類を数える。村人全員が参集していた葬式場で、植物の名称と用途について聞き取りをおこなったが、薬草として利用する6種類については、60歳代の数人の村人が薬用効果の知識をもちあわせているだけで、村人全員の共有した知

識とはいえなかった。また多くの野生植物にタイ語の固有名がなく、「草」という一般的な総称が存在する。

それに対し水田・畦畔、それに連なる用水路に生えているコナギ、オモダカ、ナンゴクデンジソウ、ドクダミ、ツボクサ、クワレシダといった可食水田雑草は、村人全員が食用として利用する知識をもっていた。またこの6種類は日常のおかずとして特に集約的に採集する。これは成人女性と子供の仕事であり、時間帯は農作業がはじまる以前の朝の早い時間帯と、農作業が終わった夕方におこなう。このように上新寨の野生植物を利用する場所は、水田内とその周辺に限定されているだけでなく、少ない種類を選択的に利用しつつ、農作業に支障のない時間帯におこなわれる。

梁子寨瑤二隊では、利用する野生植物は判明しただけで62種類にのぼる。聞き取り調査をおこなった梁子寨瑤二隊のT氏は、ヤオ族の呪医的な存在であり、そのため薬草に対する知識が非常に豊富だった。しかし村での聞き取り調査に集まった村人たちは、野生植物の詳細な薬用効果についてT氏ほど詳細な知識をもっていなかったが、種についてはほとんどヤオ語でその名称をいうことができた。上新寨と異なり、村人がそれぞれに豊富な植物の知識を共有しているだけでなく、野生植物に「草」という総称の概念はなく、すべてにヤオ語の固有名をもつ。

利用している71種類の野生植物の内訳は、食用が16種類、薬用が42種類、家畜のエサが2種類、有用植物が1種類である。食用に利用する野生植物の採集は上新寨と同様に女性の仕事である。水田とその周辺に生えるコナギ、オモダカ、ナンゴクデンジソウ、ドクダミといった可食水田雑草も利用するのだが、特にこれらの種類だけを選択的、集約的に利用しているのではない。畦畔や路傍、それに水路、沢、草地に生える種類の野生植物も食用として利用する。薬用として利用する43種類の野生植物のうち、8種類は水田に生える種類だが、31種類は森林内に生えている。上新寨と比較するとはるかに野生植物利用の種類が多様なだけでなく、利用する場所も水田、畦畔、路傍、水路、沢、草地、林縁、森林と網羅的な点に特徴がある。

上新寨と梁子寨瑤二隊と比較して、カービエンでは利用している野生植物は、わずかに7種類と少ない。コナギ、オモダカを食用として利用するのだが、日常的には食べない。しかもカービエンでは、そもそも水田にほとんど可食水田雑草が生えていない。

カービエンの棚田に可食水田雑草がほとんど生えないのは、彼らの棚田の形態と灌漑システムにその要因があるのではないかと考えられる。カービエンの棚田は横方向に水路状に長く、しかも横灌漑によって水を供給することを特徴とする。梁子寨瑤二隊でも横灌漑による棚田が存在するが、カービエンと同様に可食水田雑草がほとんど生えない。横方向に長い水路状の水田で横灌漑だと、水量が少ないため水深が浅くなり、そのため可食水田雑草が生えないのではないかと推測している。しかし今のところ正確な理由はよくわからない。いずれにしてもカービエンは野生植物の利用頻度が、他の2村と比較すると極端に低いことに特徴がある。

③……………考察

者米谷の生態的な環境は、①タイ族が定住する海拔およそ500～800mの河谷平野、②者米河の北側のハニ族が定住する海拔500～1,200mの者米河沿いから尾根筋、③者米河北側のアールー族

表3 野生植物利用の比較

場所		種	梁子寨瑤二隊 (ヤオ族)	上新寨 (タイ族)	カーピエン (アールー族)	備考
水田	1	コナギ	食用	食用	食用	
	2	オモダカ	食用	食用	食用	根も食べる。日本ではクワイの代用。
	3	ナンゴクデンジソウ	食用(少)	食用	—	
	4	イボクサ	食用	—	—	
	5	ホザキノキカシグサ	薬	薬(少)	×	上新寨ではすり潰し化膿場所に直接貼る。梁子寨瑤二隊では歯から血がでるときに嘔む。
	6	チョウジダテ	薬	×	×	下痢止め。目薬。すり潰して水にまぜる。
	7	スズメノトウガラシ	薬	×	—	梁子寨瑤二隊ではタカサブロウに分類。
	8	ヤナギスブタ	薬	×	—	喉が痛いときに使用 すり潰し、水にまぜて飲む。
	9	タカサブロウ	薬	薬(少)	—	梁子寨瑤二隊では頭髮や皮膚の毛が抜け落ちる症状に使う。 すり潰し水にまぜて頭髮や皮膚を洗う。 上新寨では皮膚炎に直接貼りつける。
	10	ホシクサ	薬	×	—	毒蛇にかまれたときに使う。潰して赤色になるまで火にあぶり傷口に貼りつける。
	11	ホソバチョウジダテ	薬	×	—	梁子寨瑤二隊ではチョウジダテに分類。
	12	シソ科①	薬	薬(少)	—	梁子寨瑤二隊では傷薬。すり潰して貼りつける。上新寨では腫れ物に使う。他の薬草とあわせる。
	13	シソ科②	—	薬(少)	—	毛虫が肌につきかゆいときに使う。 潰して葉につつまみ火であぶったものを使用する。
	14	サンショウモ	餌	餌	餌	ブタの餌
	15	ケミズキンバイ	—	餌	—	ブタの餌
畦畔	16	ドクダミ	食用	食用	—	
	17	カヤツリグサ	食用	×	—	
	18	セリ科 (コリアンダー系)	食用	—	—	
	19	アイダクグ	—	餌	—	水牛の餌
	20	オオチドメグサ	—	薬・毒	—	風邪薬。潰して水に入れ体を洗う。 潰して毒漁に使う。
	21	カッコウアザミ	—	薬(少)	—	鼻血のとき薬を鼻につめる。
	22	イヌドクサ	—	餌	—	牛の餌
畦畔・路傍	23	ツボクサ	食用	食用	食用	
	24	オオバコ	薬	—	薬	梁子寨瑤二隊では風邪薬。ヤオは腹痛薬
水路・沢	25	クワレシダ	—	食用	—	
	26	ミズ	食用	—	—	
	27	セリ	食用	—	—	
	28	ベゴニア	食用	—	—	
	29	ヤマニガナ	薬	—	—	肉が腐ったようになり痛いという病状に使用。すり潰し貼りつける。
草地・路傍	30	オオバコ	食用	—	—	
	31	ワラビ	—	—	食用	
草地	32	アマチャヅル	食用	—	—	
	33	ベニバナボロギク	食用	食用	—	
	34	ヨモギ	薬	—	—	頭痛薬。すり潰して水に入れて飲む。

草地	35	キク科	薬	×	餌	カービエンでは主としてブタ。梁子寨瑤二隊では化膿した傷口にすり潰して貼る。
林縁	36	オオホザキアヤメ	—	薬(少)	—	潰したものを化膿した傷口に直接はる。
森林	37	クリガシ	炭	—	—	
	38	ヒマワリヒヨドリ	薬	—	—	血止め。潰して傷口にはりつける。
	39	カラスウリ S.P.	薬	—	—	腹痛止め。煎じる。
	40	ジンジャー S.P.	薬	—	—	かすみ目、目が膿むのに効果がある。葉を潰して目の両脇に貼る。
	41	ヨシ S.P., ホウキグサ	薬	—	—	小便がでない症状に効果がある。煎じて飲む。
	42	ススキ	薬	—	—	解毒。根を煎じて飲む。
	43	ササキビ属	薬	—	—	化膿止め。毛虫にふれたときなどにも使う。葉を潰してはる。
	44	ヒリョウシダ	薬	—	—	腹痛止め。葉を潰し腹にはる。
	45	ホラシノブ	薬	—	—	解熱。葉を煎じて飲む。
	46	ミズスギ	薬	—	—	解熱。葉を煎じて飲む。
	47	イズハハコ属	薬	—	—	皮膚の化膿止め。
	48	シソ科	薬	—	—	①解毒。葉を煎じて飲む。 ②関節炎。葉を刻み火で炙って貼る。 ③体力増強。葉を生で食べる。
	49	ノボタン	薬	—	—	腹痛止め。若芽を生で食べる。
	50	アカネ科 オオフタバムグラ	薬	—	—	ラバや牛の皮膚炎に効果がある。生で食べさせる。
	51	Maesa イズセンリョウ	薬	—	—	黄疸。煎じて飲む。
	52	キツネノマゴ科	薬	—	—	月経不順。葉を煎じて飲む。
	53	ヒトツバ	薬	—	—	関節炎。葉を煎じて飲む。
	54	ヤマアイ	薬	—	—	足がだるいとき、煮て足に貼る。
	55	R ne 属	薬	—	—	体がだるいとき、樹皮を煎じて飲む。
	56	コショウ属 S.P.	薬	—	—	腹痛止め
	57	ミズ属	食用	—	—	生でも可
	58	イラクサ属	餌	—	—	ブタのエサ
	59	スズムシ草	有用	—	—	藍の原料
	60	ミヤマイラクサ	薬	—	—	ブタの病気。症状は不明 煎じて飲ませる。
	61	クラレシダ	食用	—	—	ヒカゲワラビは食べない。 区別している。
	62	ベゴニア	薬	—	—	症状不明。
	63	ガガイモ科	薬	—	—	リュウマチ。煎じて飲む。
	64	イタビカズラ	薬	—	—	リュウマチ。煎じて飲む。
	65	イワヒトデ属 S.P.	薬	—	—	リュウマチ。煎じて飲む。
	66	ヒペルス	薬	—	—	リュウマチ。煎じて飲む。
	67	ヌカボシクリハ ラン属 S.P.	薬	—	—	水腫。煎じて飲む。
	68	サクララン属 S.P.	薬	—	—	水腫。煎じて飲む。
	69	エンレイソウ属	薬	—	—	水腫。煎じて飲む。
	70	サンショウソウ	薬	—	—	水腫。煎じて飲む。
	71	ウバ	薬	—	—	傷の化膿止め。傷口に直接はる。

*種の同定は宮崎卓による。

が定住する海拔800～1,300mの尾根筋, ④者米河南側のハニ族が定住する海拔およそ500～1,000mの低い尾根筋, ⑤者米河南側のヤオ族が定住する海拔およそ800～2,000mの地域, ⑥クーツォン(老白寨)が定住する海拔1,000～2,000mの地域と, 6つの村で異なる。

各民族・村の環境利用と生業戦略をまとめると, 上新寨(タイ族)は海拔およそ500mの者米河沿いに村をかまえ, 河谷平野周辺の土地を利用する。土地の利用は海拔およそ500mを測る谷筋の溪流沿いの低い場所から, 海拔およそ800mの斜面までで, その間を水田, 斜面畑, 植物群落タイプⅣの樹林帯にゾーニングできる(図9)。棚田の特徴は, これまでの調査から者米谷に流れ込む納咪川沿いや, 溪流沿い周囲の緩斜面に広がり, 6つの村のなかでは利用できる水量が最も豊富で, しかも灌漑用水路の開削と維持も容易であることがわかっている[西谷2007a, 2007c]。そしてすべての棚田や耕作地が海拔およそ800mより低い位置にあるために, 二期作とコメの自給が可能であるとともに, パラゴムの木やバナナといった換金作物の生育にも適している。

また水田稲作にタウナギ, ドジョウ漁といった水田漁撈や[西谷2006c], 今回指摘したように可食水田雑草の採集が内部化するとともに, コナギ, オモダカ, ナンゴクデンジソウ, ドクダミ, ツボクサ, クワレシダなどを選択的, 集約的に利用してきた。反対に水田稲作に生業戦略を特化することで, 野菜栽培などの一部の生業を放棄することが可能になったといえる。

生業の変化は1970年代以前, 1980年代～2003年, 2004年以降の3つの画期に分けることができる(図10, 図11, 図12)。1970年代以前は水田で二期作をおこない, 斜面畑では綿やキャッサバを栽培していた。余剰米や綿から作った綿布, それにキャッサバはいずれも市で他の民族との交易の交換商品にするか, 市で仲買に売っていた。1982年から生産請負制が始まるが, 村では1986年から斜面畑にパラゴムの木を導入し, これが主要な換金作物になる。そして2004年以降はバナナ業者に水田を賃貸するとともに, 村民は日雇いとしてバナナの栽培と管理をおこなうといった, 水田での稲作を放棄するという劇的な変化がおきている。者米谷において上新寨以外のタイ族の村は, いずれも河谷平野沿いに分布しているが, 上新寨と同様の生業戦略と生業変化をたどることができる。

このようにタイ族の生業は, 3つの画期によって大きく変化している。しかしその背後に通底するのは, 河谷平野という特定の生態的な環境を選択もしくは占有することで, 800m以下の緩斜面の土地と豊富な水という生態的な環境に, 適合的な生業へ特化しつつ, 一部の生業を放棄するという生業戦略を編み出してきたことである。

ハニ族の村である牛籠が利用する土地は, 海拔およそ500～1,000m間と高低差がある。村の位置も海拔およそ800mと上新寨よりも高い(図9)。水田は者米河沿い, 村の北側の低い尾根上と, その周囲の斜面の海拔およそ800m以下に展開する。水田は緩斜面に広がり水量が豊富で, そのためコメの二期作と自給が可能である。そして斜面畑もほとんどが海拔およそ800m以下にあり, 1970年代以前はトウモロコシ・キャッサバ・綿が主要な作物として栽培され, 綿から藍染めの布を生産し市に出荷していた。また上新寨が1986年から斜面畑にパラゴムの木の栽培を開始するのに対して, 牛籠のパラゴムの木, バナナといった換金作物の導入は, 2005年からでありタイ族よりも常に遅れる(図10, 図11, 図12)。しかし牛籠の生業戦略の基本は上新寨と同様に, 水田も斜面畑も海拔およそ800m以下に展開するという有利な特性をいかし, 水田稲作を生業の中心にお

きつつ、さらにパラゴムの木やバナナなどの換金作物を導入できたことにある。

一方、高寨は牛籠と同じハニ族の村だが水田に適した緩斜面は狭く、また利用できる灌漑用水量も牛籠や上新寨と比較すると少ない。そして海拔およそ 800m より低い棚田は二期作が可能なのだが、これより高い棚田は一期作しかできない。1980 年代の終わりにハイブリッド米が導入されるまではコメの自給は困難だった。また者米河に面した海拔およそ 800m 以下の斜面は下新寨や巴義のタイ族が占有しているため、綿やパラゴムの木、バナナなどを栽培することができない（図 10, 図 11, 図 12）。1970 年代以前は、海拔およそ 800m 以上の斜面でトウモロコシ、キャッサバなどを栽培し主食としてきた。1980 年代以降、斜面畑ではレモングラス、キャッサバ、トウモロコシを換金作物として栽培するようになる。時代によって栽培する作物の種類は異なるのだが、斜面畑に生業の中心をおいた生業戦略をとってきたことでは共通する。

牛籠と高寨は同じハニ族の村という点や、村の背後に水源涵養林として植物群落タイプⅣを保全し、また棚田の作り方でも共通点がみいだせる。しかし生業戦略は、牛籠が水田中心であるのに対して、高寨は斜面畑が生業の中心であり、この点が大きく異なっている。

アール族の村であるカービエンでは、棚田の規模やその灌漑システムの精緻さと複雑さから水田稲作が中心であるかのように見える [西谷 2006a, 2007a]。しかし土地利用における面積比率や、栽培作物の収穫量とその販売による現金収入からみると、1970 年代以前から現在まで水田稲作ではなく斜面畑に重点をおいた生業戦略をとる（図 10, 図 11, 図 12）。そして上新寨の特徴であった、水田漁撈、可食水田雑草採集などの他生業を水田稲作へ内部化するという生業戦略はとらない。

また同じく斜面畑に生業の中心をおく高寨とは、レモングラス、キャッサバ、トウモロコシなどの換金作物を栽培する点では共通するが、カービエンでは野菜を栽培し市で販売する点が高寨とは大きく異なる。また土地利用を比較すると、高寨では樹林を形成する植物群落タイプⅣが水源涵養林として保全されているが、カービエンでは存在せず、斜面畑の休耕地の役目をはたす植物群落タイプⅡ・Ⅲの占める比率が高い。つまり高寨よりもより土地利用の開発が進み、生業戦略における斜面畑への比重が高いといえる。

ヤオ族の村である梁子寨瑤二隊の周辺は植物群落タイプⅣの樹林の面積が広く、大冷山と西隆山の周辺には、植物群落タイプⅤ・Ⅵの原生林が残る。彼らは 1990 年代まで焼畑、水田、狩猟採集といった生業を複合的におこなっていた。そのため環境利用が網羅的であり、そのことが野生植物利用の多様性に表れている。また彼らが者米谷に移り住んだ 1920 年代から 1990 年代に至るまでの期間、最も主要な現金収入は森林での藍の栽培だった（図 10, 図 11, 図 12）。1990 年代以降は 1,500m 以上の森林でおこなわれる草果栽培が藍に取って代わったが、生業が水田や斜面畑に特化するのではなく、生態的な環境を網羅的に利用しつつ森林利用に卓越してきた点に特徴がある。

クーツォン族の村である老白寨の生業は、1990 年代以前まで焼畑中心だった。彼らは利用している谷全体を、一度ほぼ全面に焼き尽くす。そのため、同じく山地を利用するヤオ族の土地利用とは異なり、村の景観は植物群落タイプⅣの樹林面積は狭く、タイプⅠ～Ⅱの草地状を呈している。そして植物群落タイプⅡの一部を毎年焼いて畑にし、陸稲、トウモロコシ、キャッサバを栽培しこれが主要な食料になってきた。収穫の不安定さを補うために野生動物を狩猟し、者米の市で売るか他の民族の村へ直接出むき、コメ、服、鉄製品との交換をおこなっていた。1990 年代以降は、焼

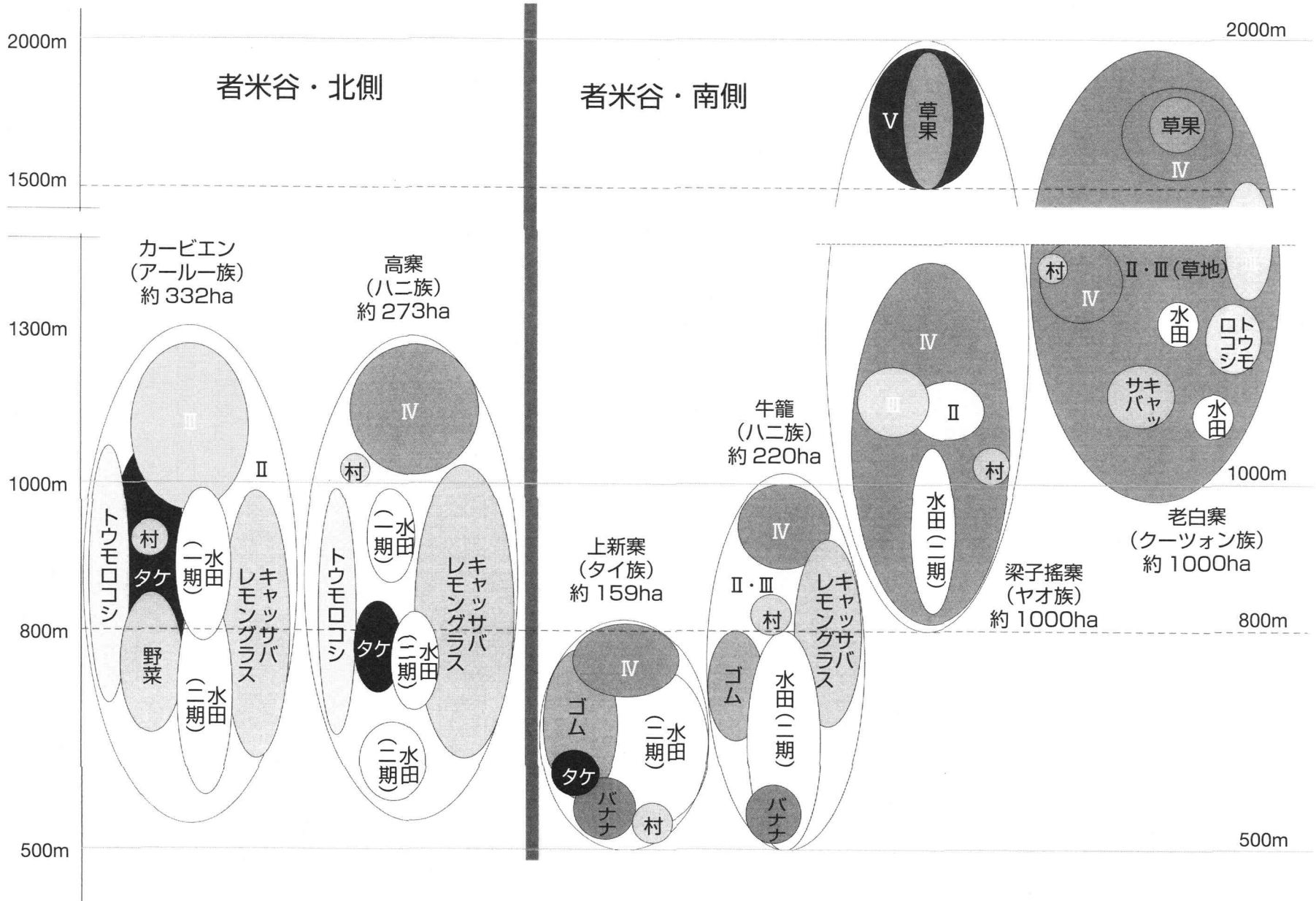


図9 各民族・村の土地利用

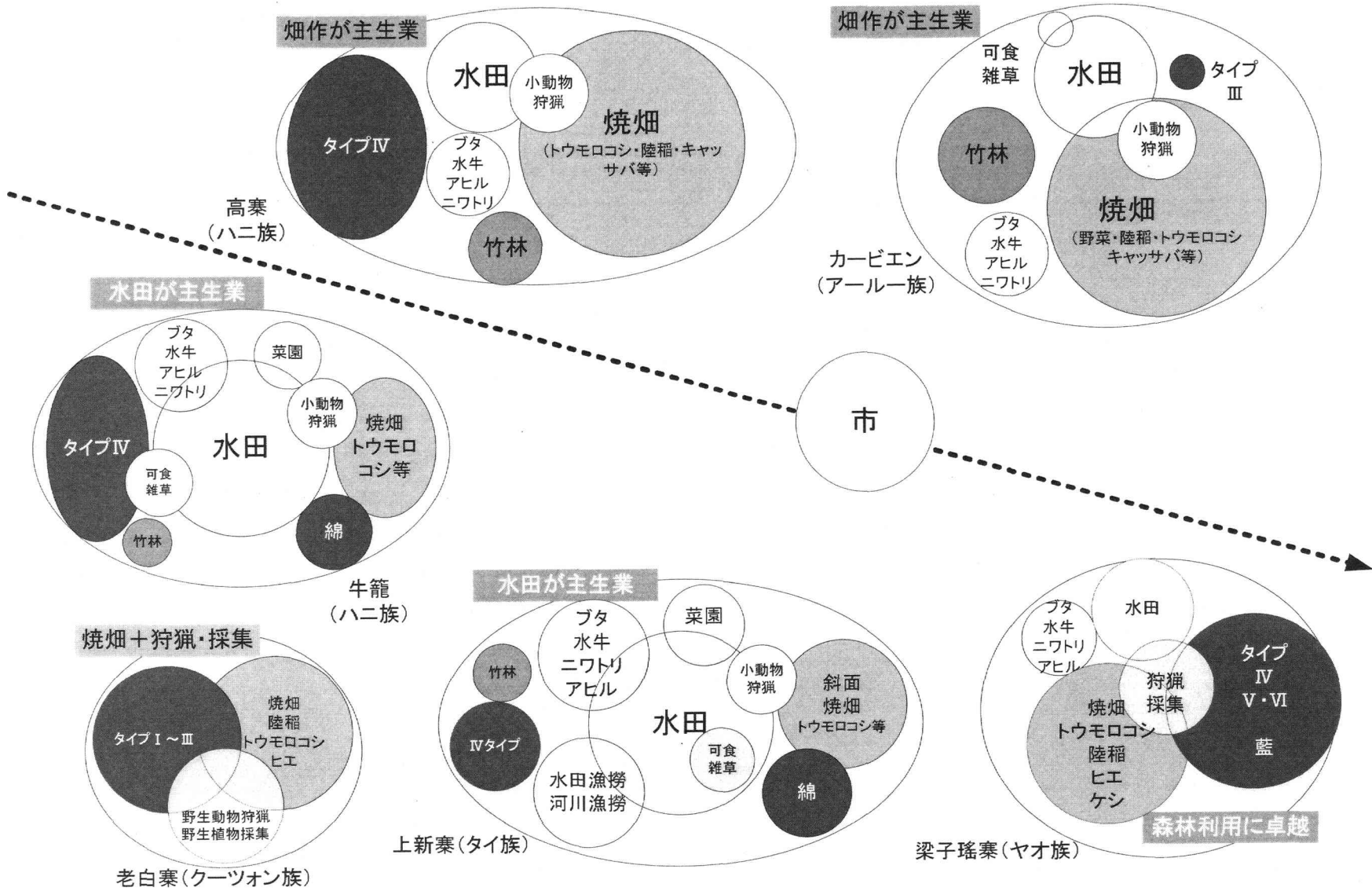


図10 1970年代以前の生業戦略

「土地利用と斜面畑からみた水田稲作の多様性」……西谷大

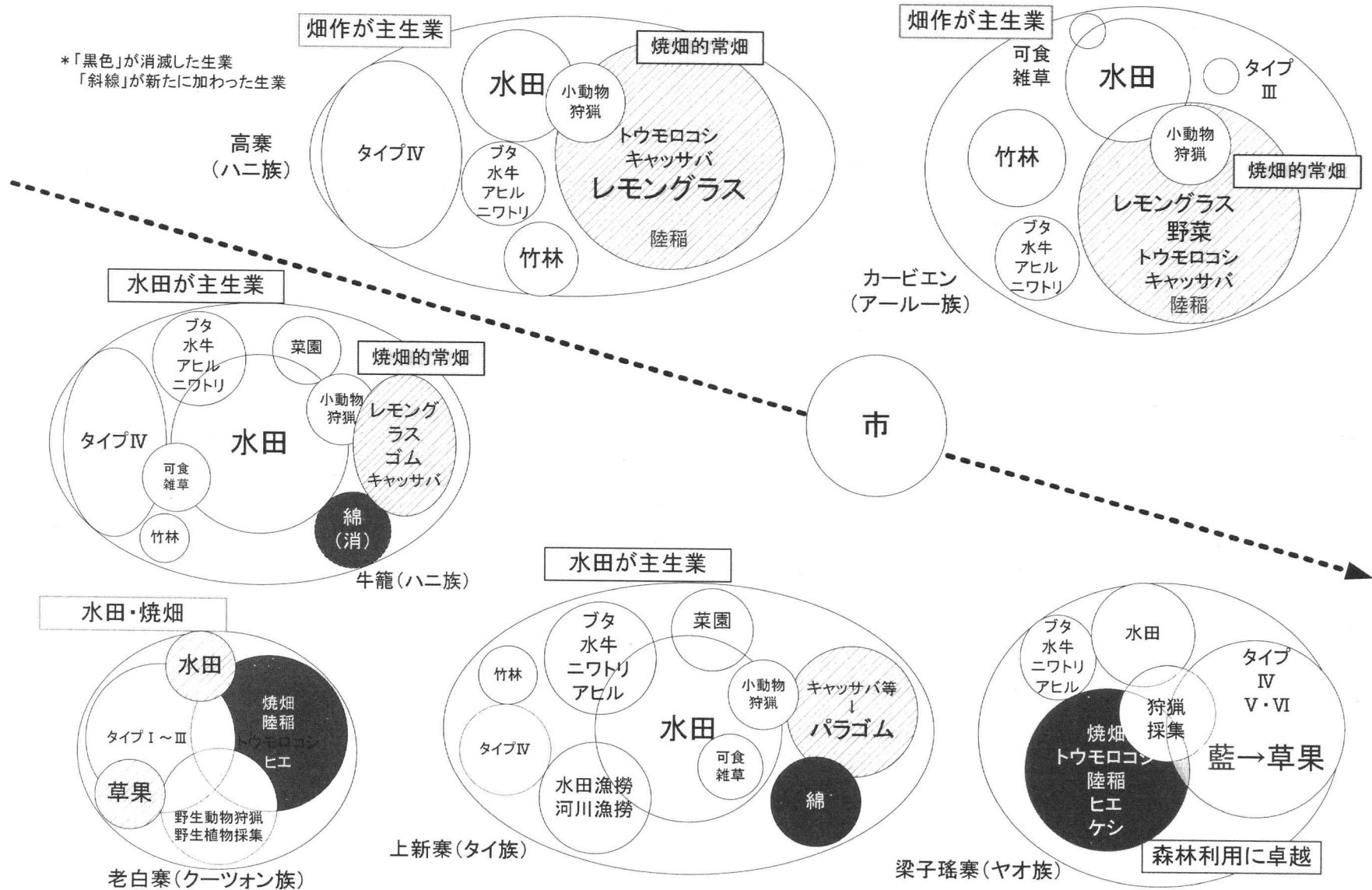
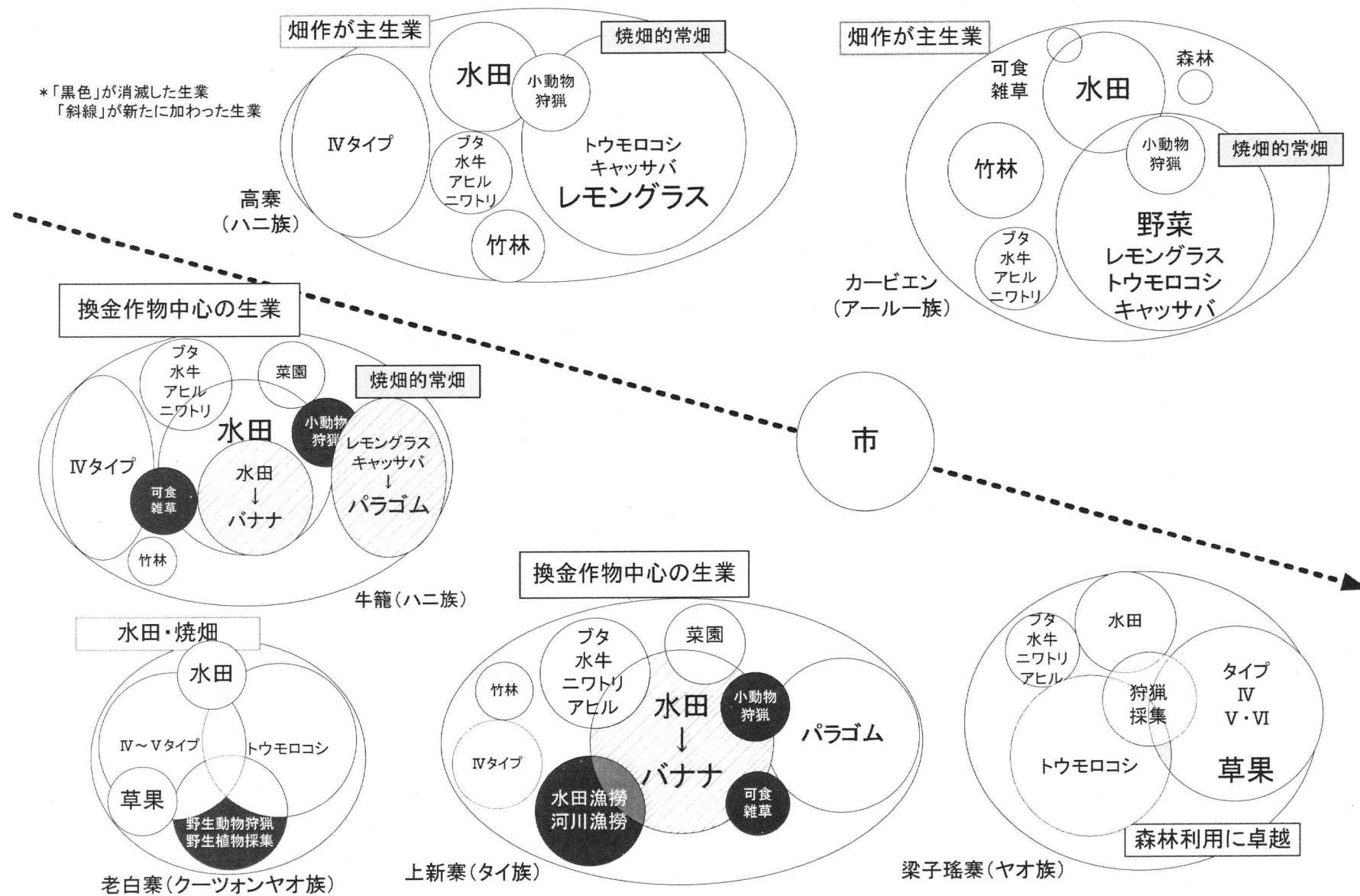


図11 1980～2003年の生業戦略の変化



*「黒色」が消滅した生業
「斜線」が新たに加わった生業

【土地利用と斜面畑からみた水田稲作の多様性】……西谷大

図 12 2004 年以降の生業戦略の変化

畑と動物狩猟はほとんどおこなわず、草果栽培とヴェトナムで商品を仕入れて市で販売する中継交易が中心になっている。

生業戦略に差異が生じる要因に、まず利用する土地の高低差がある。海拔およそ800m以下ではコメの二期作、パラゴムの木、バナナの栽培が可能であるとともに、利用できる水量が豊富である。各民族・村の生業戦略は、海拔およそ800m以下の土地を占有できるかどうかによって大きく左右される。さらに者米河の北側は南側よりも、尾根筋に幅があり斜面畑の面積が広く利用できるという違いがある。そして者米谷の南側では、山地が広がる地形を利用して、1,500m以上の森林内では草果の栽培が可能になる。

利用する土地の範囲からみると、水田稲作に集約すると利用する土地の面積が狭くなる。反対に焼畑＝斜面畑に重点をおくと広くなり、最も利用面積が広いのは森林利用を主とする生業だといえる。

各民族・村が利用する土地の範囲は、まず海拔の高低差による気温、地形、水、植生といった生態的な環境の差異性が存在し、それに対してそれぞれに適合的で独自の生業戦略を編み出している。

つまり者米谷は、生業において均質な村が面的に平均して展開しているのではない。各民族・村は者米谷の多様な生態的な環境を特定の、選択的に利用または占有しつつ、生業戦略に差異性を生み出している。いいかえれば各民族・村は利用する生態的な環境の差異性を、生業戦略の差異性に転化しているといえるだろう。

まとめ —生業複合体と水田稲作の多様性—

水田稲作の多様性を統合的に考えるため、水田とその他の生業をどのように関係づけるかを述べておきたい。高谷好一は東アジアの稲作を、景観論的な立場から「扇状地の稲作」「デルタの稲作」「平原の稲作」「湿地林の稲作」の4つの稲作型に区分している〔高谷1978〕⁽²⁵⁾。その理由は、いろいろな稲作があるけれども、けっきょくは与えられた自然条件が同じようなところには同じような性格をもった稲作が成立するという、生態的な要因で水田は決定されるためだという。

福井捷朗は東南アジアのフィールド調査から、畑作の制約要因は気候と土壌であるが、水田稲作の多様性は、水と地形によって決まると述べている〔福井1980、渡部1984〕。ミクロな地形変化が稲作に大きく影響し、稲作は畑作と比較すると多種多様であり、その多様性の原因は、地形による水条件によってほぼ決定されるという。一般的には水のコントロールが発達すると栽培の多様性がなくなり、単純化に向かうという一般則がみられ、多様性として残るのは栽培法ではなく、水のコントロールの多様性が残るといえる。水田のもつ特質は「人間の行う生産活動一般に農業を対比させたとき、農業の際だった特徴は自然的環境条件に対する依存度が極めて高いことである」という主張である〔福井1997〕。

者米谷の生態的な環境利用を灌漑システムという視点で比較してみると、そこには「自然的環境条件」が大きな影響を与えており、そのことが灌漑システムの多様性を生み出している〔西谷2006a, 2007b〕。そのため灌漑システムの相違から、各村が利用する生態的な環境の差異を抽出することが可能になったといえる。

しかし「水田と呼ばれる農地にはその他の農地にはみられない人為的な工作がなされる。そこには稲のみが植えられる」[福井1997]と、水田をコメだけを作る場所として限定的にとらえることは、水田のもつ多様な機能を見落とすことになる。また従来一般的にいわれてきた「灌漑農業技術特有の現象として、過去の労働が土地に蓄積されるといわれる。稲作が畑作にはみられない工学的適応⁽²⁶⁾という特徴を本来もっている限り、水田にも過去の労働が蓄積される「先祖代々の水田」は、単に所有権が代々相続された水田というだけでなく、ご先祖の汗がくっついている水田という意味をもつ」[福井1997]といった、水田は「歴史的コスト」がかかるという主張は、かならずしも当を得ているとはいえない。

筆者がこれまで述べてきたように、者米谷にみるアールー族やヤオ族が短期間に棚田を作ってしまう実態は、水田を作るには長い時間と労働が必要な「歴史的コスト」を必要とするとは必ずしもいえないし、ヤオ族が水田を移動的に利用するスタイルは、水田稲作をおこなえば定住的になるとは限らないことを示している[西谷2006a, 2007b]。つまり水田は「定住的に利用する水田」もあれば「移動的に利用する水田」もあり多様な利用が可能なのだといえる。

確かに生態的な環境の多様性が灌漑システムの多様性を生み出しおり、水田は「自然的環境条件」によって、その形態が左右されている。しかしそれだけでは、者米谷の各民族・村の生業戦略を理解することはできない。

市川昌広は、東南アジア島嶼部の熱帯雨林気候下にみられる湿地田稲作の植え付け技術は、これまで移植であると画一的に分類されてきたことに異論をとなえている。彼はサラワクのイバンは、移植による田植えもおこなうのだが、種籾を水田に直接撒く散播という方法も使い、湿地林植生の状況に応じて雑草の多寡を見極め、数年ごとに移動しながら湿地林に田を拓くことを明らかにしている。その目的は雑草の影響を少なくするためと、散播が移植より労働力の省力化がはかれるためであるという。さらに散播をおこなう理由として、イバンの生業は、焼畑、換金作物の栽培、自家消費や販売のための狩猟や林産物の採集、または出稼ぎなどのさまざまな仕事を複合的におこなっており、水田に投下する労働力も、他の生業との関係性をみながら世帯ごとの生業戦略をたてていると指摘している。つまり散播による方法は、他生業との関係性において、田植えを省力化する上で必要な技術だと主張する。市川の主張は、水田は他の生業との関係性によって多様に変化することを示しているといえる。

安室知は日本国内の広い範囲で、1980年代の半ばから水田漁撈についての実地調査を精力的に推し進めた[安室1998, 2005]。その研究成果として水田漁撈について、(1)自給的生業としての重要性、(2)金銭収入源の重要性、(3)水田漁撈が生み出す社会統合、(4)水田漁撈の娯楽性という4つの意義を指摘している。さらに日本の稲作史を、生計維持システム(複合生業論)という視点から再検討をおこなっている。日本列島で稲作への特化が進んだとき、水田漁撈をはじめとする他生業が稲作という生業への内部化が進行し、複合的な生業がおこなわれてきたことが日本の稲作社会の自給性を維持する要因になったと主張する。

者米谷においても、確かにタイ族の生業は水田に特化し、さらに水田漁撈や可食水田雑草などの他の生業を、水田稲作へ内部化してきた[西谷2006c]。しかしタイ族が他の生業を内部化できた背景には、生業を斜面畑に集中させ、野菜栽培を精力的におこなうアールー族や、森林利用に卓越し

藍の栽培をおこなってきたヤオ族、そして野生動物の狩猟を生業としてきたクーツォン族など、生業戦略が異なる複数の民族・村の存在があり、相互の生産物の交換を視野に入れる必要がある。つまり者米谷という1つの地域は、多様な生業戦略が集合し相互に補完しあうことで生業複合体を形成しているのだが、そこには市の存在が大きく影響していることが明らかになっているからである〔西谷2005a, 2005b, 2006b, 2007b〕。

市を成立させるには、「生産物の現金化と生活必需品の購入」、「徒歩移動における限界性」、「差異性の認識による分業創出機能」、「小商いの集合による商品数の創出と多様な選択性」といった要件が必要である。「生産物の現金化と生活必需品の購入」とは、市周辺の村民は野菜などの生産物を市で販売することである。例えば者米の場合だと、アールー族は野菜を、タイ族はブタ肉、白い木綿布、輸入した野菜・果実、ヤオ族は藍・草果、ハニ族は藍染めの木綿布、クーツォン族は籐籠・野生動物と、村・民族単位で販売する商品に差異性があった。

各民族・村は同じ生産物を持ちよって売り買いしているのではなく、意識的に差異性を創出しそれを利潤に結びつけてきた。さらに「生産物の処理の自由度と技術の分担による製品の分業創出」は、市という場は、交易がはじまると自然発生的な分業体制というシステムを生起させる機能を持ち、商品の差異が創出されていく。この分業は各民族が得意な技術を所与のものとして有していたのではなく、市という場で交易がおこなわれ相互に得意分野を認識し、その差異性を強化しながら創出していく。いわば市には「差異性の認識による分業創出機能」が埋め込まれている。反対に市を利用し商品を売る側の立場にたてば、商品の差異性を創出することが絶対的に必要になる。

また移動商人側からみれば、村民の「徒歩移動における限界性」は、移動商人が活躍する場を作り出しているのだが、彼らは者米谷では生産されない商品を輸入し、その商品の種類の差、価格の差、そして市日の差を利用しながら利潤をあげている。定期市のもつ1つの特徴である「小商いの集合による商品数の創出と多様な選択性」は、各露店の品揃えの商品数は少ないのだが、それぞれの露店は、他の店が販売していない種類の商品を品揃えすることで差異化をはかりつつ、市としては差異が集積することによって網羅的に商品を取りそろえることができる。

者米谷の生活世界は、民族・村単位で生業が相互に補完しあう生業複合体によってささえられており、それを可能にしたのが定期市である。その定期市の本質とは、生産物を交換し利潤をあげるという市場メカニズムが機能する場なのだが、交換が成立するためにはモノに差異性を創出することが絶対的な条件となる。

例えばタイ族は市を介することで、コメを戦略的に利用して水田稲作に集約化し、その上で他の生業が水田稲作に内部化した戦略をとることが可能になった。アールー族が斜面畑に特化できたのは、市を介した野菜販売という手段を編み出したからである。またヤオ族は森林利用に卓越し、生態的な環境を網羅的に利用する自然埋没型の生業戦略なのだが、それは市を介して藍や草果とコメ・野菜などと交換できたために可能になったのだといえる。

各民族・村単位での生業戦略を個別にみると、生態的な環境と共生した生業戦略をとっている。しかし者米谷の各民族・村の生業戦略と市が作る生業複合体とは、人が生態環境の差異を生業の差異に転化し生業の差異から生まれる生産物の差異を市を介することで交換し、そこから利潤を生み出す市場メカニズムに他ならない。

つまりタイ族の生業が水田へ特化できた要因として、タイ族が生産しないモノを他の民族・村が補完的に生産することで成立していた可能性も視野に入れる必要があるということだろう。タイ族以外の民族・村が野菜栽培、藍の栽培、野生動物狩猟といった生業をおこなうため、こういった生業を放棄する、すなわち外部化することが可能になり、水田稲作の特化へと進展していった。その結果として水田漁撈や可食水田雑草の採集を、水田稲作に内部化することができた。タイ族が水田稲作に特化できたのは、異なった生業をおこなう他の民族・村の存在があったからこそ可能になったのであって、水田魚撈や可食水田雑草を水田稲作に内部化したのはその結果だったのではないかと考えられる。

者米谷の各民族・村の生業は相互に補完しあい、者米谷という1つの地域で生業が複合的に形成する生業複合体のもつ特質は、タイ族が水田稲作への特化が進んでいくのとは相反して異なった生業戦略を創出させる作用がある。つまり山住のアールー族やハニ族の村では、河谷平野のコメや綿との取引のために、斜面畑での畑作に生業の中心をおき、ヤオ族は森林利用に重点をおくなど、棚田での水田稲作以外の生業への特化が進展する方向へと働く。つまり者米谷の河谷平野の村では、生計活動全体において水田稲作への他生業の内部化が進むのに対して、山住の村では生業の並列化が同時に進行する。者米谷の生業複合体は、さまざまな形態の生業を複合するだけでなく、相互の生業に強く影響を与えながら絡み合うことで形成されているのではないかと推測できるのである。

者米谷の生態的な環境は複雑であるが、者米谷の各民族・村はこの多様な生態的な環境を、それぞれが網羅的、均質的に利用しているのではなく、それぞれがある特定の生態的な環境を、部分的に選択して利用している。いずれの村も水田稲作をおこなうということでは共通するのだが、その他の生業との関係性からみた生業システムは全く異なっている。そのため同質で差異のない生業戦略が並列的、均一的に展開しているのではなく、むしろ反対に生業戦略にそれぞれに独自性と差異性が存在する。つまり者米谷の生業複合体は、生態的な環境の差異性を生業戦略の差異性に転化することで、多様な生業戦略が集まり相互に補完しあっており、市を介し生業戦略の差異化が促進され、生業複合体はより強固に進展してきたといえるだろう。このことが彼らを「水田稲作農耕民」という1つ概念だけでは把握しきれない、多様な水田稲作のあり方を創出している要因になると考えられる。

註

(1)——本論文の資料は、文科省科学研究費補助金・基盤B(2)海外『実践としてのエスノ・サイエンスと環境利用の持続性—中国における焼畑農耕の現在—』(2003～2006年、研究代表・篠原徹)の調査による。なお調査期間は、2003年3月11日～3月19日、同年8月25日～9月12日、同年11月5日～12月25日、2004年5月18日～6月15日、同年11月15日～12月22日、2005年7月11日～9月15日、2006年1月23日～2月24日、同年9月21日～11月2日、2007年1月23日～3月31日の計9回にわたっておこなった。

(2)——例えば王清華は、「ハニ族は、哀牢山の自然生態環境に対して、深い知識をもち、自然を尊敬し適応しながら、自然を利用するという規範にのっとり(棚田による)農業を実践してきた」(括弧内は筆者注)と述べている。

(3)——ハニ族の棚田が注目されはじめた1つの要因は1980年代以降、開放政策によって中国国内だけでなく、国外の研究者やマスコミが、元陽県に足を踏み入れることが可能になったことがあげられる[史2002]。こうした流れを受けて1990年代半ばから、ハニ族の棚田を世

界文化遺産に登録する動きがはじまった。ハニ族の棚田、森の保全などに代表される自然利用の姿を、「自然との共生」や「資源の持続的利用」が原初からあったように画一的に表現される背景には、世界文化遺産登録という政治的な動きと密接に関係していると思われる。世界文化遺産がもつ、価値観の一元化という問題については、吉田憲司編集の「特集文遺産とミュージアム」を参照(『民博通信』No.108, 2005)。

(4)——百瀬邦泰は、ハニ族が棚田を維持するために水源となる森林＝竜山の保護が重要であり、ハニ族自身もその大切さを認識していると述べている。しかし現在森林が維持管理されている背後には、解放後の大躍進時代の政治的権力の介入による森林伐採の罰則行使の導入と、それにもまして竜山が生活に与えてくれる喜びが重要であると指摘している [百瀬 2003]。

(5)——者米拉枯族郷、老集寨郷は従来1つの郷であったが、1978年に2つの郷に分離した。

(6)——ダニエルス・Cが指摘するように、後から移植してきた漢民族が少数民族であり、現在他の民族に対して使用されている「少数民族」という言葉は適切なものではない [ダニエルス 1999]。また「民族」という言葉自体があいまいである。むしろ毛里和子が指摘するように「エスニック・グループ」という方が適切である。しかし叙述の便宜上、本稿では「少数民族」という言葉を使用する。

26の民族は平面的だけでなく、高度によってもある程度の棲み分けがおこなわれている。一般的にいわれるのは、高原の盆地や河谷平野などには、タイ、ソウ、回、満、ペー、ナシ、蒙古、アチャン、ブイ、スイ族が居住する。中山間地域には、ハニ、ヤオ、ラフ、ミャオ、ワ、チンポー、プーラン、ドアン、ジノ族が居住する。さらにそれよりも高度が高い高山では、リス、チベット、プミ、ヌー、トールンなどの民族が居住するといわれている [謝 1999]。

(7)——漢字表記は、それぞれ傣(タイ)、哈尼(ハニ)、瑶(ヤオ)、古聰(クーツォン)、阿魯(アールー)、苗(ミャオ)、壮(ジョワン)、哈備(ハーベイ)、莽(マン)である。アールー族は、彝(イ)族の一支族であり、クーツォンは拉枯(ラフ)族の一支族である。本稿ではカタカナ表記で民族名を表記する。

(8)——国家が公定する56の民族(漢族を含む)に含まれない民族。独特の言葉をもち、かつては村内婚しかおこなわれていなかったという。金平県だけでなく、雲南省においてハーベイ人が居住するのはこの村だけだと

いわれている。

(9)——例えば普耳傣は小乗仏教を信仰するが、その他の3つのタイ族はアニミズム的が信仰が強く、ピーと呼ばれる霊が病気や災厄をおこすと信じている。上新寨は、黒傣族の村である。

(10)——土司は元代以降、中国と直接境界を接する諸民族において、ある民族が一国を形成しないまま、分立する各地の支配者が個別に中国王朝と交際し、州・県の知事職や、衛所制にそった軍事指揮官の称号を受けた者たちをさす。清国においては、さらにこれらを区分し、軍事指揮官の称号を受けた者たちを土司、州・県の知事職を受けた者たちを土官と呼ぶ。

(11)——植物群落の分類基準の構築は、篠原徹と宮崎卓がおこない、筆者がそれにしたがって、フィールド踏査をおこなった。

(12)——土地利用の面積を算出する作業のうち、者米谷における土地利用のフィールド調査とデジタルマップの作成は筆者がおこなったが、そのための基礎的な作業方法の構築、GISソフトによるデータの解析、および面積計算はすべて梅崎昌裕がおこなった。

(13)——これは1970年代以前の者米谷の生業が、固定して変化がなかったととらえているのではない。1970年代以前の生業形態が成立するまでも、さまざまな変遷過程を経てきたと考えられる。しかし者米谷には1950年代以前の文献資料は一切存在せず、また聞き取り調査によって1950年代以前の各民族・村の生業を復元し比較することは困難である。

(14)——藍は5～7月(農暦)に、山の斜面の森林や谷筋の森のなかに植えられる。収穫は次の年の8月におこなわれる。藍の製造方法は、1.葉を乾かす。2.地面に土穴を掘って、ここに乾燥した葉と水を入れて3日間寝かせる。3.土穴を掘り水に石灰を加えて一緒にまぜあわせる。4.土穴の横にさらに人が入れる程度の縦穴を掘り、土穴の底のあたりから横方向に穴をあけ、藍のとけ込んだ石灰水を取りだす。5.自然に乾かし藍玉にする。鄧家では、1999年まで藍を生産していた。毎年およそ1,000kgを生産して、2,000元ほどの収入になったという。

(15)——現在でも農閑期には、男性が仲間と山小屋で数週間すごしながら鳥類やネズミを捕る。

(16)——彼らが現在も利用する土地の範囲は、山岳地帯の森林内にあるためすべて踏査できていない。そのため正確な面積は算出できていない。

(17)——梁子寨瑤二隊の草果畑は、いずれも山中の険しい森林のなかにありすべて踏査していない。

(18)——原生林には1996年から植え付けを開始する。きっかけは狩猟をするためにこのあたりをまわっていたときにみつける。試しに苗を植えてみたところ生育がよかったために決定する。つまりこのあたりまで彼らの生活圏だったといえる。

(19)——草果は、3～7月（農曆）に植える。7～8年後に収穫が可能になる。まず果実のなかの種を植えて苗床を作る。村の周辺の菜園で育てる場合は水をやらないが、乾燥した場所や3～4月の乾季には毎日水をかける。1～2年かけて苗を育てる。ニワトリの糞を入れ、化学肥料は入れない。草果畑に苗を植えて以降は水をやる必要はない。草果畑にする森は、木をある程度切って陽あたりをよくし、下草を刈り取る。

草果畑に苗を植えて以降は年に2～3回、草取りにいく。しかし草果の丈が高くなると草を刈る必要はない。8月（農曆）以降、海拔の低いところから収穫をはじめ。海拔およそ2,000m付近の草果畑は9月から収穫をはじめ。

草果畑には、草果を乾燥させる出作小屋が併設してある。小屋の上部にもうひとつ屋根がけの場所がある。上の小屋は下の小屋の床面より2mほど高い。下の小屋のつきあたりには焚き口があり、これが煙突状になって上の小屋の床面に通じている。そこに2×3mの簀の子を敷く。小屋の奥の焚き口で火をたくとその煙と熱が上の小屋の簀の子の下から上にのぼり、草果を乾燥させる。簀の子の上には一度に200～300kgの草果をおく。三日三晩火をたき続ける。1,000kgの草果を乾燥させるのに、2,000～3,000kgの薪が必要である。100kgの生の草果を乾燥させることで2kgの乾燥草果が得られる。鄧家の草果畑だと草果の収穫と乾燥に2～3週間が必要である。

乾燥させた草果は村までラバを使って運ぶ。梁子寨瑤

二隊の場合は、仲買が村まで買い付けにくるが、者米に草果を持っていき仲買に売る場合もある。税金は仲買人が売ったときに彼らが1,000kgにつき500～600元を支払う。

(20)——当時、鄧家の当主が金平で村の代表として出席した政府関係の会議で、元陽から来たヤオ族と知り合いになり、彼から草果の情報と栽培技術を教えてもらい、植え付けるようになったという。

(21)——牛籠のクイックバードの衛星画像は、村の範囲をすべて網羅していないため、個々の面積計算はおこなっていない。ここで記載した数値は現地でおこなった簡易地形測量をもとにしている。

(22)——老白寨についてはクイックバードの衛星画像が入手できていない。そのため村の面積は、スペース・シャトルの衛星画像から推定する方法をとった。

(23)——例えば黄魚はヴェトナムでは1kg = 30元であるが、者米では40元で売れる。

(24)——植物の同定は宮崎卓による。

(25)——さらにその後、「山間盆地の稲作（扇状地の稲作）」「デルタの稲作」「平原の稲作」「湿地林の稲作」「火山島の稲作」5つの類型に分類している [高谷 1985, 1987]。

(26)——「農学的適応」と「工学的適応」は石井米雄が提唱した概念である。タイ北部の井堰灌漑農業を王権が関与する水利農業であると理解し、それによる社会を「準水力社会」と規定する。これに対してデルタに成立したアユタヤの中世国家は、水を制御するより与えられた水条件に適応した品種の採用によってコメを生産する農業に基盤を置くとする。このようなタイ国の歴史におけるチャオプラヤー河の上流、下流の対照を、石井は工学的適応による「古代核心域」と、農学的適応による「中世的貿易国家」の立地とした [石井 1975]。

引用・参考文献

- 天野元之助 1940 「現代支那の市集と廟会」『東亞学』2
 天野元之助 1953 『中国農業の諸問題（下）』技報堂
 石原 潤 1987 『定期市の研究—機能と構造—』名古屋大学出版会
 尹 紹亭 2000 『人と森林—生態人類学視野中的刀耕火種』雲南教育出版社
 尹 紹亭（白坂 審訳）2000 『雲南の焼畑—人類生態学的研究—』農林統計協会
 市川昌広 2000a 「サラワク州イバン村落における移動湿地田稲作の変遷」『東南アジア研究』東南アジア研究センター、38巻1号
 市川昌広 2000b 「サラワク州イバン村落における湿地田稲作—植え付け方法にみる適応戦略—」『東南アジア研究』東南アジア研究センター、38巻1号
 市川昌広 2003 「サラワク州イバン村落の世帯にみる生業選択」『TOROPICS』12(3)
 市川光雄 1997 「環境をめぐる生業経済と市場経済」『岩波講座文化人類学 第2巻 環境の人類史』岩波書店

- 雲南省志編纂委員会 2001 『雲南省志—地理志—』雲南人民出版社
- 雲南省金平苗族瑶族傣族自治州志編纂委員会 1994 『金平苗族瑶族傣族自治州志』三聯書店
- 雲南省綠春県志編纂委員会 1991 『綠春県志』雲南人民出版社
- エバーハルト, W 1942 『古代中国の地方文化』(白鳥芳郎監訳) 六興出版
- 王 清華 1999 『棚田文化論—哈尼族の生態農業』雲南大学出版社
- ダニエルス, C 1999 「少数民族の歴史をどうみるか—近年の研究紹介をかねて—」『アジア遊学』9号
- 史 軍超 2002 「対元陽哈尼族梯田申報世界遺産的調査研究」『哈尼族文化論叢』雲南民族出版社
- 篠原 徹 1990 『自然と民俗—心意のなかの動植物—』日本エディタースクール出版部
- 篠原 徹 1995 『海と山の民俗自然誌』吉川弘文館
- 篠原 徹 2006 「棚田景観にみる歴史性と文化性の相違—中国・雲南省紅河州者米におけるタイ族・ヤオ族・アールー族—」『叢書 [文化財保護制度の研究] 文化的景観の成立, その変遷』第18回国際文化財保存修復研究会報告書, 独立行政法人文化財研究所, 東京文化財研究所国際文化財保存修復協力センター
- 謝 蘊秋・李 先緒 1999 『雲南境内の少数民族』民族出版社
- スキナー, G. W. (今井清一・中村哲夫・原田良雄訳) 1979 『中国農村の市場・社会構造』法律文化社
- 高谷好一 1978 「水田の景観学的分類試案」『農耕の技術』
- 高谷好一 1985 『東南アジアの自然と土地利用』頸草書房
- 高谷好一 1987 「アジア稲作の生態構造」『稲のアジア史』第1巻, 小学館
- 田村善治郎・TEM 研究所 2003 『棚田の謎—千枚田はどうしてできたのか—』社団法人農山漁村文化協会
- 中国科学院民族研究所雲南民族調査組・雲南省民族研究所編 1963 『雲南省紅河哈尼族彝族自治州金平県苦聰人社会経済調査』(出版社不明)
- 刀 潔 2006 「金平河奔人社会文化調査」『雲南特有族群社会文化調査』(和少英編), 雲南大学出版社
- 中島峰広 1999 『日本の棚田—保全への取り組み—』古今書院
- 中村哲夫 1978 「清末華北の農村市場」野沢豊・田中正俊編『講座中国近現代史』二, 東京大学出版会
- 西谷 大 2005a 「市のたつ街—交易からみた多民族の交流—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第121集, 国立歴史民俗博物館
- 西谷 大 2005b 「雲南国境地帯の定期市—市の構造とその地域社会に与える影響—」『東洋文化研究所紀要』第147冊, 東京大学東洋文化研究所
- 西谷 大 2006a 「雲南国境地帯の棚田—アールー族とヤオ族の灌漑システム—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第125集, 国立歴史民俗博物館
- 西谷 大 2006b 「市はなぜたつのか—雲南国境地帯の定期市を事例として—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第130集, 国立歴史民俗博物館
- 西谷 大・刀潔 2006c 「中国の水田漁撈—黒タイ族のウケ漁—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第133集, 国立歴史民俗博物館
- 西谷 大 2007a 「灌漑システムからみた水田稲作の多様性—雲南国境地帯のタイ, アールー, ヤオ族の棚田を事例として—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第136集, 国立歴史民俗博物館
- 西谷 大 2007b 「市の誕生と都市化—生業経済の定期市から市場経済の市へ—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第136集, 国立歴史民俗博物館
- 西谷 大 2007c 「定住的水田と移動的水田—生業システムからみた多様な水田稲作の姿—」『弥生時代はどうかわかるか』(広瀬和雄編) 学生社
- 西谷 大・篠原徹 2005 「雲南省紅河州者米谷のアールー族とヤオ族の灌漑システム」『コモンズと生態史研究会報告書』文部科学省科学研究費補助金特定領域“資源人類学”
- 福井捷朗 1980 「サラワク低地の土地利用と未利用」『東南アジア研究』17巻4号
- 福井捷朗 1997 「エコロジーと技術—適応のかたち—」『稲のアジア史 普及版アジア稲作分化の生態基盤—技術とエコロジー』渡部忠世・福井捷朗編, 小学館
- 増井経夫 1941 「広東の墟市」『東亜論叢』4
- マリノフスキー, B, デ・ラ・フェンテ, J 著 (信岡奈生訳, 黒田悦子解説) 1987 『市の人類学』平凡社
- 村松一弥 1973 『中国の少数民族—その歴史と文化及び現況—』毎日新聞社
- 百瀬邦泰 2003 「雲南の棚田地帯を涵養する雲霧帯の土地利用の変遷と竜山の消長」『アジア・アフリカ地域研究』第3号

-
- 安室 知 1998 『水田をめぐる民俗学的研究—日本稲作の展開と構造—』慶友社
安室 知 2005 『水田漁撈の研究—稲作と漁撈の複合生業—』慶友社
八幡一郎 1959 「魚伏籠」『民族学研究』23 卷 1・2 号
雷 兵 2002 『哈尼族文化史』雲南民族出版社
羅 鈺 1996 『雲南物質文化—採集漁獵卷—』雲南教育出版社
和 少英 2006 「金平傣族社会文化調査」『雲南特有族群社会文化調査』（和少英編），雲南大学出版社

（国立歴史民俗博物館研究部考古研究系）

（2007年6月7日受理，2007年9月14日審査終了）

Land Use and Diversity in Wet Rice Cultivation as Seen in Terraced Fields: Livelihood Strategies of the Tai, Hani, A'lu, Yao and Kucong Tribes in Zhemigu, Yunnan Province

NISHITANI Masaru

Eight tribes and one commune live scattered in the villages of the Lahu people and the village of Laojizhai in Zhemi in the Autonomous County of Jinping Miao, Yao, and Dai in the Honghe Hani and Yi Autonomous Prefecture in China's Yunnan Province. The people live at different altitudes ranging from the river plains about 500 meters above sea level to the mountain slopes about 1,500 meters above sea level. The complex nature of the topography and climate has created a diverse range of living environments, which has led to differences in the livelihood strategies of each tribe and village unit.

This difference in livelihood strategies has generated diversity in wet rice cultivation. Other factors are the ecological environment, land use and the terraced fields on the mountain slopes, methods of using wild plants and the regular markets held in Zhemigu every sixth day.

The ecological environment of Zhemigu is complex. Each of the tribes and villages in Zhemigu do not use these diverse ecological environments exhaustively or homogenously. Instead, they use the land by selecting a part of a particular ecological environment. Consequently, the livelihood strategies of each tribe and village are independent and different. A composite of livelihoods is formed by the bringing together and mutual supplementing of these diverse livelihood strategies.

This composite of livelihoods in Zhemigu has become even stronger due to the differentiation in livelihood strategies mediated by the markets and is possibly one factor behind the creation of diverse ways of cultivating wet rice. It is, therefore, not possible to understand these people using the single concept of "wet rice farmers".



写真1 上新寨(タイ族)の棚田

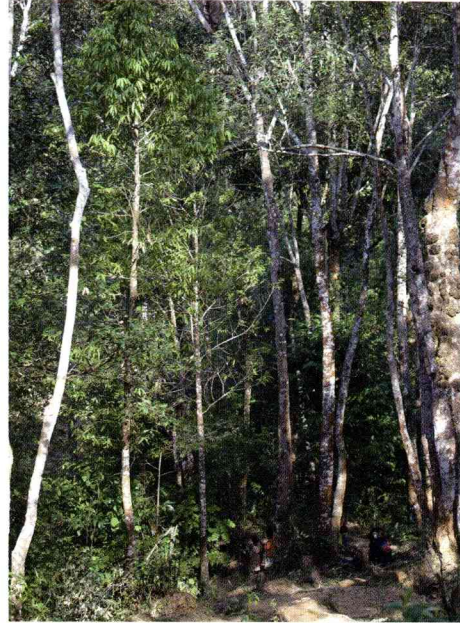


写真3 上新寨の植物群落タイプIV
クーツォン族がシイの実を採取している



写真2 上新寨の棚田とその上に広がる竹林



写真4 カービエンの斜面畑



写真5 アールー族の棚田



写真6 斜面畑でキャッサバを収穫する村人

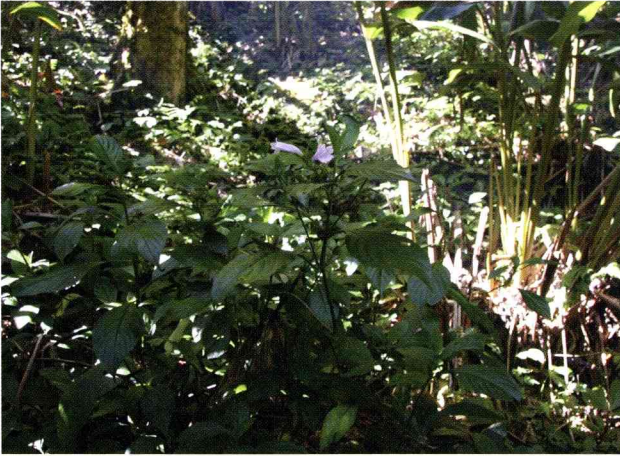


写真7 藍(リュウキュウアイかその仲間)



写真8 ヴェトナム国境沿いに広がる植物群落
タイプV・VIの原生林



写真9 原生林内の草果畑



写真10 実った草果



写真11 草果を乾燥させる小屋



写真12 乾燥させた草果



写真 13 高寨とその背後に広がる水源涵養林



写真 14 高寨の棚田



写真 15 高寨の斜面畑



写真 16 牛籠の村を背後の水源涵養林からみる



写真 17 木綿布を織る牛籠のハニ族の女性



写真 18 藍色に染めた木綿布



写真 19 老白寨
周囲には植物群落タイプⅢが広がる



写真 20 森を下から火をつけて焼く



写真 21 老白寨の谷状の地形
奥の山の稜線がヴェトナム国境になる



写真 22 老白寨の草地状の景観



写真 23 老白寨の緩斜面とコル上の棚田



写真 24 市でイヌを売るクーツォン族の男性